慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	クラークソン著「前工業化イングランドの経済1500-1750」(四) : 第4章工業
Sub Title	L. A. Clarkson, The pre-industrial economy in England, 1500-1750
Author	大貫, 朝義 酒田, 利夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1975
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.68, No.4 (1975. 4) ,p.380(78)- 401(99)
JaLC DOI	10.14991/001.19750401-0078
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19750401-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資　料

クラークソン著「前工業化イングランドの経済 1500-1750」(四)

第4章　工　業

L. A. Clarkson, The Pre-Industrial Economy in England, 1500-1750
(B. T. Batsford Ltd., London, 1971, pp. 268)

大貫　朝義
酒田　利夫

工業部門の構成

最も開発の遅れた経済においてさえ，加工食料品，衣類，住居といった基本的需要を満たすために，工業が存在する。今日のアフリカ及びアジアの多くの地域において，工業は労働の約4%から28%を雇傭している。一方，前工業化イングランドについて，グレゴリー・キング Gregory King は総人口550万のうち25万を職人及び手工業者として分類した。キングの数値は，彼によって「労働者及び奉公人」並びに「小屋住農及び貧民」という項目に分類された，少なくともその生計の小部分を工業から得ている多数の人々を考慮に入れていないのみならず，製造業に利害を有する多数の農民，商人及び店舗主をも考慮に入れていないため，17世紀後期のイングランドにおける工業の重要性を甚だしく過少評価したものとなっている。〔しかし実際には，〕一方における製造業と他方における農業及び商業との間には，鋭い分化は全く存在しなかったのである。

この章においては，工業は製造業のみならず鉱業及び建設業をも含むものとして考えられている。前工業化イングランドにおいては，市場の需要が主要な工業活動〔の水準〕を決定した。食料に対する需要は，肉屋，醸造業者，パン屋，蒸留酒製造業者，粉屋及びこれに類する職種を増加させた。衣類に対する需要は，多数の織物業，衣類製造業及び皮革工業（レザー・クラフツ）を支えた。また家屋に対する需要は，建設業の多くの部門において無数の労働者に対する雇傭を創出した。木材及びなめし皮の加工に従事する手工業者のみならず金属加工業者も，家屋及び農場の其処此処で使用される諸道具や家庭用品に対する需要，並びに旅行と運輸に必要とされる馬具，鞍，荷馬車及び小舟に対する需要を満たした。

消費財を生産する以上のような諸工業〔部門〕の重要性は，16，17世紀の経済著作家によって認識されていた。『国家論』(1549年) の著者〔ジョン・ヘイルズ John Hales 乃至トマス・スミス卿 Sir Thomas Smith とされている〕は，商人・手工業者（アーテイフイチャーズ）を3つのグループに分類している。第一のグループは，製造業者ではなく，輸入品の〔国内〕流　通（ディストリビューション）に従事した人々から成っていた。第二のグループには，「靴屋，仕立屋，大工，石工，タイル張り工，肉屋 bowchers，醸造業者，パン屋，凡ゆる種類の食料品業者 vitailers」など，国内市場における消費のために商品を生産した人々が含まれた。第三のグループは，国内需要のみならず輸出貿易に対しても供給する手工業者から構成され，従って著者の見解によれば特に厚遇さるべき人々であった。即ち，「織元，皮なめし工，製帽工，梳毛織物業者，……」[(1)]などである。金属加工業者については，全く言及されていない。17世紀中葉に，ヘンリー・ベラシーズはイングランドの『主要な富』'chiefe ryches' について次のように記した。

「最も重要にしてまず第一に挙げらるべきものは毛織物であり，これは全ヨーロッパを殆どイングランドの支配下に置き，我が国産の織物（ワグアリイ）を着用せしめている。次いで重要なものは錫乃至白蠟製品

注(1)　A Discourse of the Common Weal of this Realm of England, ed. E. Lamond, 1893, pp. 91-92. (邦訳，出口勇蔵監修，『ヒューマニズムの経済思想——イギリス絶対主義の一政策体系——』，1957，有斐閣)

であり，これはコーンウォール産のものが優れている。……イングランド産のなめし皮は品質優良であり，海外で好評を博している。靴下は短靴につきものであるが，我が国の梳毛織靴下は全ヨーロッパにおいて多くの需要がある。……石炭は，少なくとも諸鍛冶工にとっては欠かすことのできない，非常に重要なもうひとつの商品であり，人々が我が国産のなめし皮〔製の靴〕をはいているのと同様に，馬は我が国産の鉄と石炭〔によって作られた蹄鉄〕を打たれているのである。何となれば，他のすべての財宝を蓄蔵するための〔錠の製造に使用される〕鉄さえもまた，イングランド産のものだからである(2)」。

『国家論』の著者と同様に，ベラシーズはある工業が輸出貿易にどれほどの比重を占めるかということによって，その工業の重要性〔の度合〕を判断した。ある研究者は，1783年に諸工業をその産出額によって下記の如く位置づけているが，その場合何が資料として用いられたのかは明らかでない(3)。

紡毛織物	1,680万ポンド
なめし皮	1,050万ポンド
鉄	870万ポンド
鋼及び鋼板(ブレイディング)	340万ポンド
錫	100万ポンド

実際の評価額は推定であるが，この表において毛織物業，なめし皮製造業及び冶金工業に与えられた重要性は，他の事実によっても十分に確認することができる。

前工業化イングランドの工業部門の構成を明らかにするうえで最も有効な方法は，イングランドの特定の地域を研究することである。トーニー教授 Tawney やホスキンズ教授 W. G. Hoskins の如き学者によって先駆的研究がなされているにも拘らず，主として，工業を考察する場合に歴史家たちが毛織物業〔の重要性〕に目を奪われて，他の殆どすべての工業諸部門を除外してきたという事情のために，このような観点から研究が行われることは殆どなかったのである。しかし，市民台帳 freemen's rolls，教区簿冊 parish registers，課税台帳 taxation lists，軍役簿 muster rolls，検認財産目録 probate inventories の如き史料を用いることによって，工業活動の性格に関して多くの情報を得ることができるのであり，第2表にはその一部が示されている。

史料及びその分析方法は，表に付された注において論じられている。しかしながら，前工業化イングランドにおいては職業の分化が高度の発達を遂げることはなかったのであり，〔従って〕労働力をある特定の職業に従事するものとして分類することは，いかにもせよ実際の状態をかなり単純化することになり，誤ったものとなる可能性がある，ということが強調されねばならない。多くの手工業者や商人(トレーダーズ)は農民乃至農場労働者でもあったのであり，これらの者たちの一部に対しては，農業は農業以外の活動と比較してその所得のより大きな部分をもたらしていたのである。第2表においては，たとえ農業がある人々の主要な収入源をなしていたとしても，彼らが市場向生産を目的として〔農業以外の〕ある職業に従事していたと信ずべき正当な根拠がある場合には，それらの者たちをその農業以外の職業に分類するという原則に従った。このような方法を採用すると，どうしてもイングランドのいくつかの地域における農業の重要性を過少評価した統計になってしまう。しかし，もうひとつの方法，即ち農業を主要な職業として営んでいる場合にはそれらの人々を農業〔部門〕に分類するという方法を採用すると，近世イングランドにおける経済活動のかなりの程度の多様性が蔽い隠されてしまい，また重要な地域差も曖昧化されてしまうことになるのである。このように，前工業化イングランドの職業分類の統計は，今日の低開発国に関する類似の統計がもつ弱点を，〔しかも〕同じ理由から，有している。

「大部分の低開発国において，いわゆる農民の多くが農繁期にも，ましてや農閑期においては，その時間の多くの部分を小規模の運輸業 transport, porterage 及び商業に費しているということを考えるならば，〔職業統計の有する〕欠点は……明らかである。彼らは，自らが生産した商品のみならず転売を目的として購入した商品をも取引するであろう。……このような〔職業〕分化の不完全さは，農民以外の階層についても指摘しうるものであろう。……低開発国における多くの人々の経済活動は，ある特定の職業の遂行(パスート)としてよりも，多くの異なる仕事の遂行(パフォーマンス)として叙述する方が，

注(2) H. B[elasyse], An English Traveler's First Curiosity: or the Knowledge of his owne Country, 1657, in Hist. Mss. Comm., Various Collections, II, 1903, p. 200.

(3) D. Macpherson, Annals of Commerce, vol. IV, 1805, p. 15.

より適切である[4]」。

前工業化イングランドにおける職業分類に関する資料の性質から凡ゆる困難が生ずるのみならず，そこには上述のような概念上の問題も含まれるのであるから，寧ろ統計〔をとること〕は全く避けるべきである，という結論が導かれるかもしれない。しかしながら，凡ゆる欠点にも拘らず，第2表は産業革命以前のイングランドにおける職業構成（オキュペイショナル・ランドスケイプ）のいくつかの興味深い特質を示している。

まず第一に，この表は農業活動の実態（イタステント）を十分に反映するような形で作成されてはいないのであるが，それでも職業としての農業の重要性は明白である。農村地域においては，労働力の50％から80％が多かれ少なかれ完全に農業に従事していた。毛織物業や金属加工業の如き農村工業が行われた地域においては，農業労働力の比率はヨリ低かったが，第2表に示された限定された資料からさえも，農村工業がイングランド全域に特徴的に存在したわけではなかったことが明瞭である。この点において，中部エセックスは特に興味深い。中部エセックスは中南部サフォーク及び北部エセックスといったイースト・アングリア毛織物業地域からあまり隔たっていない地域であったが，市場向毛織物製造業は，全くと言ってよいほど純農業的な色彩の強かったこの地域の経済に対して，影響を与えることが殆どなかったのである。他方，アシュビー・デ・ラ・ズシュ Ashby-de-la-Zouch は，ヨリ小さな都市が農業と極めて強固な繋がりを有していたこと，そしてヨリ大きな都市においてさえ，この繋がりは数字が示す以上に強いものであったと思われることを示唆している。〔しかし言う迄もなく，〕農業は都市においてはヨリ重要性の低い職業であった。

農業以外の職業に目を転ずると，都市と農村地域とでは顕著な対照がみられ，都市的職業という性格が非常に強かった食料品加工業や食料品販売業及び運輸業の分布においては，この対照が特に顕著であった。たとえば，17世紀前期のグロスター，テュークスバリー Tewkesbury 及びサイアレンセスター Cirencester においては，人口の30％がこれらの諸活動に従事していたのであり，これにひきかえグロスターシャの農村部においてこれら〔の都市的職業従事者〕が占めた比率は，僅かに9％に過ぎなかったのである。トーニー教授の言葉を借りるならば，都市は

「何よりもまず……仕上げ及び流通（ディストリビューション）〔両部門〕の中心であり，これらの部門には他の諸部門に通常みられる労働者数よりもヨリ多数の労働者が集まった。都市は周辺農村で産する仕上げを必要とする生産物を取扱い，また地域内では生産しえない商品を農業地域に供給し，農業地域と遠隔地ロンドンとを結ぶ結節点として機能していた[5]」。

これはまた，他の前工業化社会における都市の特徴でもあった。〔たとえば〕18世紀のペンシルヴェィニアにおいては，「商業，運輸，市政，加工業が」，都市の「主たる経済部門」をなしていた。他方，1950年代のカンパラ近郊においては，アフリカ人の人口の51％が小売商業乃至はなんらかの種類の熟練手工業（スキルド・クラフツ）に従事していた[6]。衣類製造業，なめし皮加工業及び他の諸工業（トレーズ）に従事する多くの手工業者は，ただ単に消費財を生産するのみならず，自己の店舗乃至は市の屋台（マーケット・ストールズ）でその販売も行ったのであるから，〔都市における〕流通（ディストリビューション）の重要性は第2表が示唆する以上に大きかったのである。

同様に，製造業 manufacturing employment も農村よりも都市にヨリ集中していた。1750年以前においてはイングランドの農村部のみが工業生産の重要な中心地（インポータント・シート）であった，という仮説が一般的であることを考えると，この点は強調する価値がある。確かに，全国到る所で多くの製造業が家庭内消費を目的として農家や小屋の中で営まれていたのであるが，地域的な，全国的な，また国際的な市場に向けて供給している農村工業は，後に検討する理由のために特定地域に限定されていた。

半ダースほどの手工業群――〔即ち，〕〔毛〕織物業，衣類製造業，皮革工業，金属加工業，建設業，及び飲食物加工業――が，都市労働力の約4分の3に対して

注（4） P. T. Bauer and B. S. Yamey, The Economics of Under-developed Countries, 1957, pp. 34-5.

（5） A. J. and R. H. Tawney, 'An Occupational Census of the Seventeenth Century', Econ. Hist. Rev., vol. V, 1934, p. 38.

（6） J. T. Lemon, 'Urbanization and the Development of Eighteenth-century South-eastern Pennsylvania and Adjacent Delaware', William and Mary Quarterly, 3rd ser., vol. XXIV, no. 4, Oct., 1967, p. 502; A. W. Southall and P. C. W. Gutkind, 'Townsmen in the Making: Kampara and its Suburbs', East African Studies, no. 9, East African Institute of Social Research, Kampala, Uganda, 1957, p. 51,（両文献の引照は，A. C. Davies, C. Ehrlich 両氏に負う。）

職を与え，また農村地域における農業以外の職業の大部分をなしていた。第2表に示された織物業の就業統計は，今日の大部分の経済史家が与えている〔毛〕織物業が重要なものであったという印象を，幾分薄めるものである。16世紀から18世紀にかけてのイングランドの輸出貿易において，毛織物は明らかにその最大部分を占めており，従って〔当時の〕経済政策の論議の中心をなすものであった。しかしながら，いくつかの特定地域 well-defined regions を別とすれば，毛織物業は他の諸手工業と同様，就業〔機会〕の創出源としてはあまり重要なものではなかったのである。第2表においては，その一部がイングランド西部の毛織物業地域に含まれるグロスターシャが，このような特定地域の一事例をなしている。17世紀前期においてこの州の男子人口の約17%が毛織物業に従事しており，またこの州の5つのハンドレッドにおいては男子労働力の4分の1以上が毛織物業で働いていた。尤も逆に，労働人口の5%から10%が毛織物生産に従事するにすぎないハンドレッドも10を数えた。他のふたつの主要な毛織物業地域であるイースト・アングリアの一部及びヨークシャのウエスト・ライディングと並んで，ウィルトシャの一部及びサマセットのグロスターシャとの州境地帯においても，恐らく織布工（テクスタイル・ワーカーズ）の高度の集中がみられた。デボンシャもまた全国市場及び国際市場向けに生産する毛織物業を有しており，それはある程度まで第2表に反映されている。しかしながら，毛織物生産における特化は，専ら農村地域にみられた現象であるというわけではなかったことに注意しなければならない。ウースター市は毛織物生産に極めて高度に特化していたし，コヴェントリ Coventry とノリッヂは共に16，17世紀における重要な毛織物業都市であった。しかし他の諸都市においては，毛織物業は重要なものではなかった。

衣類製造業——鍔付帽子製造業者（ハッターズ），帽子製造業者（キャップメーカーズ），仕立屋など——は，都市においては多くの労働〔力〕を擁して行われたが，農村地域においては家族の需要を満たす家内の（ハウスホウルド・パースタイムズ）嗜程度のものを別とすれば，あまり重要ではなかった。都市は近隣の農民（ローカル・フアーミング・パピュレイションズ）に対し，彼らが週市に足を運ぶ折々に衣類を供給した。ヨークやノリッヂの如きヨリ大きな都市では，〔ひとつには〕そのヨリ大きな人口に供給するために，〔また，ひとつには〕ヨリ小さな地方都市（プロヴインシヤル・タウンズ）に較べて，〔これらの大都市が〕ヨリ広範な地域に対する市場圏〔の中核〕として機能したために，衣類製造業者が相対的に高度に集中していた。農村地域において〔も〕家庭内の需要を満たすために大量の衣類が生産されたに相違なく，これらの生産物（スチャルズ）はしばしば馬によって市場へと運び込まれた。たとえば，17，18世紀において，北部イングランドの一部の地域では，靴下及びその他の衣類の手編み工業が農場収入の重要な補足部分をなしており，完成品はロンドン及びその他の場所で販売された。17世紀後期及び18世紀前期においては，編み枠使用の編物工業がミッドランズ東部の多くの村において確立されるに至った。

前工業化期の諸都市 pre-industrial towns における最も重要な職業群のひとつは，なめし皮及び皮革製品の製造業であり，これはしばしば都市労働人口の5分の1前後を占めていた。皮革工業（レザー・クラフツ）は，農村地域においてはあまり重要ではなかった。尤も，我々は他の資料から，特定の農村地域が全国市場向けのなめし皮生産の中心地であった事実を知っているのであり，そのような地域には軽皮革製品及び手袋の生産に特化したイングランド西部の一部，ロンドンの製靴業者に向けてなめし皮を生産したサフォーク高地の酪農業地域，サセックス東部の諸港からなめし皮を輸出したウィールド地方，及び17世紀後半に長靴並びに短靴の製造業地域として発展したノーサンプトンシャが含まれていた。18世紀前期には，恐らく総計15万の人々がイングランドにおけるなめし皮及び皮革製品の製造に従事していた。皮革工業が重要なものとして営まれていたことは，長靴や書籍の表装（ブツク・バインディングズ），バケツやベッド・ハンギングズに適したなめし皮がいたる所で生産され，入手されえたことを反映している。生産されたなめし皮の半分以上が履物〔の製造〕に使用され，残りの大部分は鞍や馬具〔の製造〕に，そして種々の世帯〔道具〕及び工業の用途に使用された。

金属加工業者は，全国に散在していた。農村地域においては，鉄製諸道具及び諸器具を製造しまた修理するために，鍛冶工が必要とされた。金属加工業者は都市に高度の特化をみせ，都市民及び近隣農業社会（ローカル・フアーミング・コミユニテイ）の双方に供給していた。実際，16世紀の殆どすべての世帯の財産目録には，通常鉄製の炉辺用及び料理用の器具が挙げられており，また多くの財産目録は真鍮及び白蠟製品，一部鉄製の農〔場用〕具，鉛製の分銅及びその他の金属製品を記載している。これらの〔金属製品の〕大部分は恐らく局地的に生産されていたが，16世紀までにはイングランドの特定地域が釘，鋏，鍵及びその他の金属製品の生産に特化しつつあり，全国

市場に向けて供給していた。第2表からも窺えるように，ミッドランズ西部における人口のかなりの部分が金属工業（メタル・トレイズ）に従事していた。シェフィールドの刃物類〔生産〕への特化は14世紀にチョーサーによって言及されており，17世紀中葉までにはシェフィールド教区は決定的に工業的な性格を帯びていた。ディーンの森は，多数の金属加工業を擁するもうひとつの〔特化〕地域であった。

建設労働者は農村よりも都市にヨリ多く存在したが，建設業においては地域的集中への傾向は全く見られなかった。農家の大多数は簡素〔な造り〕で特別の技術を殆ど用いることなく建設され得たのであるから，大部分の村において，建設業は殆どすべての者が時折従事したような兼業 part-time occupation である場合が非常に多かったに相違ない。富裕なヨーマン〔と呼ばれる〕農民やジェントルマンのヨリ凝った造りの家屋〔の建設〕は，れんが職人，石工，ガラス職人，左官及び類似の職人に対する需要を創出し，16世紀後期及び17世紀前期における『イングランド農村の再建』'rebuilding of rural England' は，恐らくヨリ多数の専門の建設職人を生み出した。諸都市には，マーケット・ホール，商館，倉庫や商店の如き大建築物（サブスタンシャル・ハウゼズ）が存在したのであるから，都市労働力の約5%から10%が建設職人であったとしても驚くにはあたらない。

すべての都市におけるひとつの重要な手工業のグループは，飲食物の加工に関連したものであった。この〔飲食物の加工〕部門は，流通（ディストリビューション）に従事する業者と重なり合って存在した。たとえば旅籠屋（イン・キーパーズ）は，彼らの大部分が自家のビールを自ら製造したという仮定に立って，飲料製造業者（ブロセサーズ）として分類されてきている。ビールは嵩張って多額の輸送経費を要し，長距離の悪路の輸送には耐え得なかったのであるから，これ〔旅籠屋によるビールの自家醸造〕は〔寧ろ〕当然のことであった。しかしながら，17世紀前期に従来のアルコール分の少ないビールに較べてヨリ濃密な飲料である黒ビールが普及（ディヴェロップメント）したことは，内陸輸送の改善と相俟って専業的なビールの小売業者たる旅籠屋の増加を促した。ビールとエイルはイングランドの殆どの地域において一般に飲用された飲み物であるにも拘らず，その製造方法が相当に複雑でしばしば〔個々の消費者が自ら醸造することなく〕購入されたため，〔その需要を満たすべく〕前工業化イングランドには多数の旅籠屋と醸造業者が存在したのである。醸造が自家で行われた場合においてさえも――多くの財産目録は家内に醸造設備〔が存在したという事実〕を示しているのではあるが――麦芽はしばしば購入され，広く分布したもうひとつの飲料製造業者たる麦芽製造業者の勃興を促した。蒸留酒製造業は前工業化イングランドにおいては――アイルランドとは異なって――如何なる程度においても小規模家内工業（コテイジ・インダストリー）ではなく，殆どの蒸留酒製造業は販売市場に向けて営まれていた。飲料に対するものとしての食料品加工業において最多数を占めた職人は，肉屋であった。肉屋はしばしば近隣農村に放牧場を所有するか乃至は賃借していたが，その大部分は都市居住者であった。肉屋は近隣の需要を満たしたが，ミッドランド諸都市の肉屋の多くは，ロンドンの如き遠隔地市場に供給する製肉・販売業の結節点でもあった。〔即ち，彼らは肥育用家畜の〕飼育（ブリーディング・カウンティーズ）を行う諸州から家畜を購入し，首都〔ロンドン〕の肉屋に販売するために近隣の放牧場で肥育したのである。

以上においては6つの製造業グループについて論じてきたが，これは，前工業化イングランドに存在した際限なく多様な工業諸部門を公平に取り扱ったものとは言えない。イングランドの多くの地域において，人々は石炭業や金属鉱業に雇傭されており，特にアシュビー Ashby，ミッドランズ西部及びシェフィールドの如き地域においては，少なからぬ数の炭坑夫や『採鉱夫』'grubbers' が第2表の『その他の職業』'miscellaneous' の項目の中に含み隠されているのである。1608年には，ディーンの森の石炭業地域に居住する成年男子の7%から11%が，軍役簿においては炭坑夫と表記されている。前工業化イングランドの主要な石炭産出地域は，イングランド北東部のタイン河及びウェア河の渓谷〔地帯〕に所在し，そのほかヨークシャ南部，ミッドランズ西部，カンバーランド西部及びウェールズなどにも重要な石炭産出地域が存在した。合計すると，17世紀後期において恐らく1万2千人から1万人の人々がイングランドの石炭業に直接雇傭されていた。この被傭者数は，商船水夫（マーチャント・シ・メン）として雇傭された者の僅かに4分の1，なめし皮及び皮革製品の生産に従事した人々の僅かに10分の1でしかなかった。16，17世紀におけるその凡ゆる目覚しい much-vaunted 発展にも拘らず，石炭業はあまり多くの雇傭を創出しなかった。鉱山業の他の諸部門に雇傭された人々は恐らく更に少数であり，〔しかも〕大部分がパートタイムの契約であった。前工業化期における冶金工業のかなりの発展にも拘らず，銑鉄や鍛鉄及び非鉄金属の生産には，僅かに数千人の人々が雇傭されたにすぎなかった。

木工職人は採鉱夫や金属精錬工よりも〔比率のうえでは〕遙かに重要な位置を占め，そこには建設業の一部門として分類されている大工や建具師のみならず，桶屋，弓矢造り職人 fletchers，籠造りその他の者が含まれた。ノリッヂでは，彼らは16世紀に就業人口の2乃至3%を占めていた。16世紀及び17世紀前期には，ミッドランド森林地域における農場労働者の3分の1以上が，農業の副業として木材加工業を営んでおり，ノーサンプトンシャのロッキンガムの森に所在する一農村においては，18世紀中葉に強壮なる者の約10%が轆轤細工師であった。「森林地域は，その作業において木製農業用具に大きく依存するような農業文明の，自然の仕事場〔用具製造所〕であった。〔そこには〕しばしば高度に特化し複雑化した農村手工業が多数存在し，また多様性にも富んでいた(7)」。

海洋に関連して営まれる職業は，沿岸の諸都市及び諸村落に集中していた。〔そのなかで〕最も重要なものは，造船業であった。僅かに1人乃至2人の〔船〕大工を雇傭して数トンの船を建造する小造船所は，イングランドの殆どすべての港に存在した。ヨリ大型の船舶の建造は，地理的にヨリ限定されていた。17世紀前期においては，大型船舶の主要な建造地域はイースト・アングリアの海岸及びテムズ河であった。しかしイースト・アングリアの造船所は，オランダで建造された船舶，及びハルとニューカッスルの間のイングランド北東部沿岸に存在し，〔当時〕発展しつつあった造船所で建造された船舶の競争に直面して，衰退した。17世紀末までには，ケント北部は4つの大造船所——チャタム Chatham，デットフォード Deptford，ウーリッチ Woolwich，シアネス Sheernes——を有し，〔これらの造船所では〕海軍及び遠隔地貿易のための船舶が建造され，また数千人の人々が雇傭されていた。造船業は，製帆業やロープ製造業などの如き関連工業〔の発達〕を刺激した。港に運び込まれた商品は，精糖業，たばこ加工業の如き輸入原材料加工業，及び陶製のたばこパイプの製造業の如き小規模工業の勃興を促した。

それぞれ数十人乃至数百人を雇傭する多くの小規模工業が，前工業化イングランドの工業の様相を多様なものとしていた。たとえば，ウスターシャ，チェシャ及びイングランド北東部沿岸の製塩業，ホーム・カウンティーズ及びその他の地域における製紙業，ウィールド地域及びミッドランズ西部におけるガラス製造業，明礬，硝石，石鹸，緑礬，硫酸塩及びその他の原材料を生産する未発達の化学工業，更にその他の数多くの諸工業が挙げられる。1750年以前においては，これらの職種の重要性は低く，これら〔小規模工業〕は，基本的に農業的な経済における消費者の需要を満たす〔ことを専らの目的とする〕都市及び農村の手工業の前に，全く影の薄い存在だったのである。

〔諸〕工業の立地

如何なる個別的理由をもってしても，工業の立地を〔十分に〕説明することは不可能であるが，未発達な交通によって制約された経済においては，市場までの距離が〔工業の立地に対して〕明らかに大きな影響力を有していた。手工業者の大部分は都市に居住したが，これは都市街区に最も多くの人口が集中し，且つ都市街区が近隣諸村との間に最良の〔交通・取引〕関係を有していたという単純な理由によるものであった。

「〔我が〕王国の大部分の村々には〔誰かしか〕1人のなめし皮仕上工乃至は皮革加工職人が存在し，また〔かかる皮革職人を〕有さぬ村々に供給するために，大部分の市場町においては2，3乃至5人〔の〕，また多くの大都市においては10乃至20人〔の〕，〔皮革職人がそれぞれ〕存在する(8)」。

16世紀後期における皮革工業に関する以上の如き記述は，前工業化イングランドにおける他の多くの職種についても等しくあてはまる。諸工業はその顧客が存在する場所に所在する場合が非常に多く，製造業の特定部門における地域的な特化の度合は低かった。しかしながら，良好な水運〔の所在〕は，ある特定の地域において恐らく工業の発達を促進したのであって，特に生産された商品が嵩張るものである場合にはそうであった。たとえば，16，17世紀において，イングランドの他の地域の炭田と比較した場合タイン河流域における石炭業が重要な位置を占めたことは，〔このタイン河流域が〕沿岸海運によってロンドンと直接結ばれていたことによるところが極めて大きかった。これとは対照的に，17世紀前期において，ノッティンガムシャとダービーシャの州境にある内陸の炭坑からのロンドン向け石炭売却〔量〕を増大させようとする試みは，ト

注(7) A. Everitt, 'Farm Labourers', ch. VII of The Agrarian History of England and Wales, vol. IV, 1500-1640, ed. Joan Thirsk, 1967, p. 427.

(8) B. M. Lans. Ms. 74, p. 154.

第2表　前工業化イングランドにおける職業構成

場所	年次	地域区分	史料	職業構成（%） ジェントリ及び専門職	農業	織物業	衣類製造業	なめし皮製造業及び関連産業	金属加工業	建設業及び関連産業	飲食物加工業	流通及び運輸業	その他
Ashby-de-la-Zouch	1637－1643	都市	教区簿冊	5.7	32.9	2.9	5.6	20.5	5.6	8.2	8.7	7.2	2.7
Ashby-de-la-Zouch	1658－1661	都市	教区簿冊	3.7	22.1	7.4	5.1	25.0	4.4	4.4	14.0	3.7	10.3
Chester	1558－1603	港湾都市	市民台帳	3.5	?	10.6	9.3	22.6	?	5.9	12.6	?	?
Chester	1603－1625	港湾都市	市民台帳	3.5	?	13.3	11.9	21.2	?	4.7	15.5	?	?
Coventry	1522	都市	軍役簿（職業記載635）	?	?	16.9	16.3	11.0	8.0	4.5	15.5	8.5	?
Devonshire	1531－1699	州	財産目録(215)	9.8	67.4	8.4	0	1.9	0.5	0.9	4.7	5.1	1.4
Gloucestershire	1608	州	軍役簿（成人男子登録者16,000人）	3.3	50.5	16.9	4.6	4.7	3.6	5.2	5.2	3.7	2.6
Gloucester, Tewkesbury and Cirencester	1608	都市	軍役簿（成人男子登録者1,200人）	6.6	4.0	11.3	20.8		6.1	8.4*	29.4		13.3
Kirdford, Sussex	1611－1776	地方教区	財産目録(121)	3.2	73.6	4.1	2.5	1.7	2.5	4.1	2.5	1.7	4.1
Leicester	1559－1603	都市	市民台帳	?	4.8	6.6	10.0	22.0	4.6	5.9	18.6	6.7	17.8
Mid-Essex	1635－1749	州(一部)	財産目録(207)	2.4	78.7	0.5	0.5	2.4	2.4	3.9	5.3	3.9	－
Northampton	1524	都市	課税台帳（職業記載390）	?	?	10.5	5.1	23.0	3.0	7.5	15.0	6.2	?
Norwich	1558－1603	都市	市民台帳	?	－	16.2	17.1	13.4	6.2	10.4	12.4	19.8	2.8
Oxfordshire	1550－1590	州	財産目録	3.4	69.4	2.4	1.0	4.8	2.4	4.3	6.2	3.3	2.8
Sheffield	1655－1659	教区	教区簿冊（登録数311）	3.9	13.2	10.3		7.4	50.0	6.1	4.2	－	8.7
Sheffield	1700－1709	教区	教区簿冊（登録数2,681）	2.3	6.0	8.1		2.6	54.6	5.4	4.8	1.2	14.9
West Midlands	1541－1685	ダッドリィ及びストアブリッジ教区	財産目録(125)	2.4	52.8	1.6	1.6	3.2	29.6	0.8	3.2	1.6	3.2
West Midlands	1614－1787	セッドグリィ教区	財産目録(122)	－	51.6	－	1.6	－	37.7	1.6	4.1	0.8	2.5
Worcester	Before 1589	都市	財産目録	－	－	42.0	4.0	11.0	7.0	2.0	12.0	13.0	9.0
Worcester	1590－1620	都市	財産目録	－	－	54.0	1.0	7.0	5.0	3.0	14.0	3.0	11.0
Worcestershire	1550－1600	州	財産目録及び遺言状(4,280)	17.8	59.3	4.3	2.5	3.8	3.4	1.5	2.7	2.5	1.9
Worcestershire	1601－1650	州	財産目録及び遺言状(4,434)	9.1	67.2	6.7	2.5	3.2	3.6	2.5	2.6	1.6	1.2
York	1558－1603	都市	市民台帳	4.1	1.6	5.4	17.2	13.9	10.9	8.1	16.6	16.7	5.4
York	1603－1625	都市	市民台帳	3.4	－	9.3	14.2	15.2	7.9	4.3	16.5	21.7	7.2

＊木工職人を含む　　？史料に記載のないことを示す　　－数値が無視しうるものであることを示す

第2表（注）

1. 史料〔出所〕

職業構成を示すものとして，教区簿冊，市民台帳，軍役簿，課税台帳及び検認文書（プロベイト・マテイアリアル）〔財産目録・遺言状〕という5つの史料を用いた。これらの史料は，〔職業構成に関して〕正確に比較しうる情報を与えているわけではない。教区簿冊には，国教会による洗礼式，葬式，結婚式がとり行われた人物について，その職業が記録されている。教区簿冊によって人々がどの程度兼業に従事していたのかを知ることは不可能であるが，教区簿冊が注意深く保存されているとすれば，その社会の特定時点における広範な職業構成を知ることができる。市民台帳には，通常徒弟奉公乃至は世襲により，市によって市民として認可された（即ち，市内において職業を営む権利を賦与された）男性，そして時には女性の名前と職業とが記録されている。職業構成を示すものとしての，この市民台帳の史料価値は，〔一方では〕市において市民身分を出願・認可されることがどの程度強制されたのかということに，〔また他方では〕市民が名目上認可された職業に従事したのか否かという点に，かかっている。ジェントルマン及びヨーマンもしばしば市民台帳に記載されたが，市民台帳は，市居住民が農業に利害関係を有した度合乃至はその市において伝統的に挙示されていない職業に従事した度合を，過少評価している可能性がある。市民台帳はまた，労働者及び徒弟奉公を経ない職人（ワークメン）を記録していない。軍役簿は，軍役を勤めうる強壮な男子を記載しており，職業をも記録している場合には，農村地域及び都市地域における成年男子の職業に関して貴重な情報を提供する。同様に，臨時税台帳の如き課税台帳も，納税義務ある世帯主乃至は貧困のために免税となった世帯主を記載しており，しばしばその職業も記録されている。検認文書（プロベイト・マテイアリアルズ）には，しばしば遺言者の名前のみならず，職業をも記載している印刷された遺言状，及び遺言状を検認するために書かれた印刷乃至手書きの財産目録が含まれる。この種の検認文書は社会の広い範囲にわたって存在しているが，財産目録には職業が明確に記載されていない場合が非常に多く，財産目録の記載内容から職業を推定しようとすると特別な問題が生ずる（注2をみよ）。遺言状及び財産目録は，農村地域と都市地域の双方にわたって存在しており，農村地域について利用しうる唯一の史料であることもしばしばである。

2. 分　類

(a) 職業の分類は，若干修正を加えてはいるが，J. F. Pound によって 'The Social and Trade Structure of Norwich, 1525–1575', Past and Present, no. 34 (1966), pp. 67–9 において用いられた分類に従う。約言するならば，分類は次の通りである。ジェントリ及び専門職：正当な理由があって他の職業に分類されうるということがない限り，たとえば仮に財産目録が農業に直接従事してかなりの収入を得ているということを示唆していて，農業に分類されるということがない限り，ジェントルマンと記載されたすべての者〔が含まれる〕。牧師，教師などもまた，このグループに含まれる。農業：ファーマー，ハズバンドマン，農場労働者，農場奉公人，商業及び製造業に明らかな経済的利害を有していない限り，ヨーマン〔もまた含まれる〕。織物業：毛織物及びその他の織物の製織のさまざまな工程に従事したすべての職人，仕上工程における染色工及びその他の職人〔を含む〕。衣類の製造業者及び流通に従事した反物商 mercers, drapers などは，含まない。衣類製造業：なめし皮ではなく，織物を用いて凡ゆる種類の衣類を製造した者〔が含まれる〕。なめし皮製造業及び関連産業：なめし皮，並びに履物類，手袋及び〔紋章用〕側点（ボインツ）を含むなめし皮製品の製造に従事した職人〔が含まれる〕。皮革商（スキナーズ）をも含む。金属加工業：鉄及び非鉄金属の加工に従事した手工業者〔を含む〕。金属の採掘乃至製錬に従事した者は，含まない。建設業及び関連産業：れんが職人，タイル職人，石工，ガラス職人及び類似の職人〔を含む〕。れんが製造業者など〔をも含む〕。大工及び建具師は含まれるが，他の木工職人（ウッド・ワーカーズ）は含まない。飲食物加工業：飲食物の加工・販売に従事した人々，たとえば肉屋，パン屋，醸造業者，蒸留酒製造業者，ぶどう酒商人，旅籠屋，粉屋，漁師など〔を含む〕。しかし，食料品商や魚屋の如き，専ら販売に従事した人々は含まない。流通及び運輸業：卸売及び小売に従事した人々，たとえば食料品商，薬屋，反物商，絹織物商，小間物商，商人など〔が含まれる〕。輸送業者には，運送人，船頭，水夫，旅籠屋（オーストラーズ）などが含まれる。車大工もまた，このグループに含まれる。このグループと上の〔飲食物加工業者の〕グループとの間には，明らかに大きな重複がみられる。その他の職業：ここには，他の項目に挙示されなかった木工職人やその他種々の手工業者が含まれる。

(b) 〔グループへの所属が〕確定不可能なすべての記載は，除外されている。この中には，挙示されなかった労働者及び奉公人，それから財産目録の場合には，生計の資を推定することが不可能なすべての事例が含まれている。

(c) 検認財産目録は，次の如く分類されている。

(i) 遺言者の職業が記されている場合には，たとえ財産目録にその職業に関連ある資産の記載が全く見られない場合でも，遺言者はその職業を営んでいたものと断定した。(ii) 職業が記されていない場合には，財産目録はその内容に従って分類されている。遺言者を農民と断定する際には，なんらの困難をも生じないことがしばしばである。〔しかし〕遺言者が農業のみならず製造業乃至商業にも携わっていたことを示す〔記載〕事実が存在する場合には，〔分類上の〕困難が生ずる。ある商業乃至手工業が市場向けに営まれていたと正当に仮定しうる場合には，財産目録に記載されたその商業乃至手工業の資産の価値が農業資産の価値を凌駕しているか否かということにはかかわりなく，その目録はそれらの〔商・工業関係の〕職業に分類されている。(iii) 疑問あるすべての事例は，除外されている。

3. 解　釈

前工業化イングランドにおいては，職業は到底今日ほどの特化を示しておらず，従ってこの表も，ある職業と他の職業との

レント河の砂洲〔の存在〕と，ハル及び東海岸を経由する長距離輸送に高費用を要することとのために，挫折した。

それにも拘らず，市場への距離〔のみ〕をもってしては，工業の立地のすべての特徴を説明し尽すことはできない。しばしば，嵩張る原材料の輸送費用が決定的な要因となった。たとえば，薪（クワド）乃至木炭を燃料として用いる殆どすべての工業は，これらの燃料（マテイアリアルズ）が嵩張り，砕け易く，長距離を輸送するにはあまりに多くの費用を要したため，決定的に森林地域に限定されていた。1トンの銑鉄を熔融するためには1トンをかなり上回る木炭が必要とされ（17世紀のディーンの森においては，この比率は〔木炭〕3：〔銑鉄〕2であった），またそれだけの木炭を生産するためには一層多量の薪材が必要と

〔第2表(注)つづき〕

厳密な区分を示すものとして用いられてはならない。農業のグループに含まれた人々は，市場向生産の目的でなんらかの他の職業に持続的に従事したことはなかったと仮定することは，正当であろう。しかしこのような仮定は，工業生産に従事した手工業者に対しては妥当しないのである。従って，この表は以下に述べる如くに解釈されねばならない。たとえばオックスフォードシャにおいては，16世紀後期における人口の約70％が農業に従事していた。残りの30％も恐らく農業に利害を有していたが，彼らは製造業乃至商業のさまざまな部門に多大な経済的利害を有していた。第2表に挙げられているミッドランド西部の諸教区の場合には，人口の約3分の1が市場向けのなんらかの金属工業に従事していたが，これらの人々は農業を兼営する場合もしない場合もあったものと思われる。従って，この表は，相当多くの工業が存在した農村地区における農業の重要性を，寧ろ過少評価し〔たものとなっ〕ている。しかしながら，この表は，工業の地域的分布にかなりの相違がみられたことをも明らかにしている。それぞれの手工業者にとって，製造業が唯一の収入源となっていたのか，それとも主要な乃至は補足的な収入源となっていたのかという点に関しては，この表から何かを述べることは不可能である。しかしこの表は，さまざまな地域における労働人口が，市場向生産を目的とする農業外の職業になんらかの程度において巻き込まれていた，その度合を反映している。

4. 参照文献

ASHBY-DE-LA-ZOUCH: Calculated from information provided by Mr. C. J. Moxon, Balliol College, Oxford.

CHESTER: D. M. Woodward, 'The Chester Leather Industry, 1558-1625', *Trans. Historic Soc. Lancs. and Cheshire*, vol. 119, 1967, pp. 66-7.

COVENTRY: Calculated from W. G. Hoskins, *Provincial England*, 1963, pp. 78-80.

DEVONSHIRE: Calculated from *Devon Inventories of the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, ed. M. Cash, *Devon and Cornwall R. S.*, new ser., vol. 11, Torquay, 1966.

GLOUCESTERSHIRE: Calculated from A. J. and R. H. Tawney, 'An Occupational Census of the Seventeenth Century', *Econ. Hist. Rev.*, vol. v, 1934, pp. 59-61.

GLOUCESTER, TEWKESBURY AND CIRENCESTER: *ibid.* p. 36.

KIRDFORD: G. H. Kenyon, 'Kirdford Inventories, 1611-1776', *Sussex Archaeological Collections*, vol. 93, 1954, pp. 79-80.

LEICESTER: Calculated from W. G. Hoskins, *op. cit.*, pp. 94-6.

MID-ESSEX: Calculated from F. W. Steer, *Farm and Cottage Inventories of Mid-Essex 1634-1749*, Essex Record Office Publication, no. 8, 1950.

NORTHAMPTON: Calculated from W. G. Hoskins, *op. cit.*, pp. 79-80.

NORWICH: J. F. Pound, 'The Social and Trade Structure of Norwich, 1525-1575', *Past and Present*, no. 34, 1966, pp. 67-69.

OXFORDSHIRE: Calculated from *Household and Farm Inventories in Oxfordshire, 1550-1590*, ed. M. A. Havinden, Hist. Mss. Comm. Jp 10, 1965.

SHEFFIELD: Calculated from E. J. Buckatzch, 'Occupations in the Parish Registers of Sheffield, 1655-1719', *Econ. Hist. Rev.*, 2nd ser., vol. I, 1949, pp. 145-6.

WEST MIDLANDS: Calculated from *Dudley Probated Inventories*, ed. and trnscr. by J. S. Roper, 1st ser., *1544-1603*, Dudley, 1965; 2nd ser., *1605-1685*, Dudley, 1966; 3rd series (Dudley, 1968); *Stourbridge Probated Inventories, 1541-1558*, ed. and trnscr. by J. S. Roper, Dudley, 1966; *Sedgley Probate Inventories, 1614-1787*, ed. and trnscr. by J. S. Roper, Dudley, 1966.

WORCESTER: A. D. Dyer, *The City of Worcester in the Sixteenth Century*, unpub. Ph. D. thesis, Univ. of Birmingham, 1966, p. 474.

WORCESTERSHIRE: Calculated from J. West, *Village Records*, 1962, pp. 125-7.

YORK: Calculated from *Register of the Freemen of the City of York*, vol. II, *1559-1759*, *Surtees Society*, vol. CII, 1899.

されたため，鉄の製錬業及び精錬業の立地はとりわけ燃料の入手可能性(アヴェイラビリティ)によって大きく影響された。16世紀前期のイングランドにおける主要な製鉄業地域はウィールド地域のサセックスであり，生産が拡大するに伴い，製鉄業はケント，サリーなどの隣接地域に拡がっていった。1574年までに，イングランドにおいて稼動中の58の熔鉱炉のうち51は，薪燃料のほかに鉄鉱石の豊富な供給と，鞴及び鍛鉄所のハムマーを動かすための流れの急な多くの水流とを有するウィールド地域に所在していた。この地域はまた，サセックス東部の諸港及び北に向ってテームズ河に注ぎ込む航行可能な河川とを介して，ロンドンとの交通の便にも恵まれていた。17世紀前期には，ウィールド地域における薪燃料及び労働の費用が上昇するに伴い，ウィールド地域はイングランドの他の地域にその地位を譲った。1653年までには，ウィールド地域における熔鉱炉の数は，全国総数の漸く半数に当る36にまで減少した(熔鉱炉の生産能力は恐らく増加したのであるが)。これとは対照的に，ディーンの森，ウェールズ南部，ヨークシャ及びミッドランズ西部がすべて製鉄業地域として発展し，18世紀前期にはランカシャの製鉄業地域 the Furness district がこれに加わった。これらの地域では燃料が豊富に供給され，サセックスやケントと比較すると他の諸工業及び家庭消費のための薪燃料・木材に対する競合的な需要が〔生み出されることも〕少なかったため，ヨリ低額の燃料費用——そして恐らくは労働費用も——しか必要としなかった。

薪を燃料とするその他の諸工業のなかには，ガラス，れんが及びタイルの製造業，製塩業，製銅業及び他の化学工業，麦芽製造業及び染色業などが含まれた。17世紀の間に，これらの諸工業のいくつかは薪燃料への依存から脱し，その代りに石炭を使用するようになった。造船業が必要とする木材は，工業用及び家庭消費用に必要とされる薪燃料・木材とは異質のものであったが，〔ともかくも〕造船業は木材(ウッド)〔への依存〕から脱し得ない一工業部門であった。薪燃料は20年から30年の若木とその下生えから成る雑木林(アンダーウッド・アンド・コピシーズ)から供給されたが，造船業者はしばしば一世紀以上を経た適当な形と寸法の樫の木を必要とした。更に輸送費用のために，造船業者が〔完成した船を〕運搬しうる範囲は海岸20マイル程度のところに限定されていた。ケント北部に大造船所が集中して存在したことも，また16世紀後期にイングランド南部において木材の不足についての不平が聞かれたことも，この要因によって説明される。というのは，製鉄業者と造船業者とは同じ原材料を用いはしなかったが，両者ともに，それ自体他の土地利用方法(ユーズ)の競争下におかれていた同じ森林地を求めて争ったからである。

原材料の供給もまた，皮革工業，とりわけ皮なめし業の立地に影響を与えた。なめし皮製造に用いられる原材料は，獣皮，樫のタン皮及び水〔流〕であった。皮なめし業は明らかに都市に集中していたが，その理由は，市場が近くに存在するということ——これは靴屋及びその他の皮革加工職人にとってはヨリ重要であった——よりも，寧ろ都市が精肉業の中心地であり，従ってまた獣皮の供給源であったということにあった。ロンドンのレドンホール Leadenhall 及びサザーク Southwark の獣皮市場は，ロンドンの皮なめし工及びなめし皮仕上工——彼らは17世紀末にイングランドにおけるなめし皮総生産量のおよそ10%を生産した——並びにイングランドの他の地域における〔なめし皮〕製造業者に対して〔獣皮を〕供給した。サフォーク高地地帯 High Suffolk においては，地域内の酪農業の副産物として生産される獣皮を用いた皮なめし業が発達した。そしてイングランド西部の牧畜農業を営む諸州におけるなめし皮加工業の盛行は，地域内で生産される獣皮〔の供給〕に基づいており，これはアイルランドから輸入される羊及び子牛の獣皮によって補足された。皮なめし用タン皮の供給もまた，〔皮革工業の〕立地に影響を与える重要な要因であった。ロンドンの皮なめし工は，サリー，ケント及びサセックスの森林地からタン皮の供給をうけていた。ロンドンの極く近隣の地域において〔タン皮の〕供給が枯渇するに伴い，獣皮の生産地にタン皮を搬入するよりも，獣皮をタン皮の生産地に搬出するほうが，しばしばヨリ経済的となった。かくして，ロンドン産の獣皮は，熔鉱炉及び鍛鉄所で用いるために伐採された木からタン皮が生産される，ウィールド地域やヨークシャ南部の如き鉄工業地域に向けて輸送された。仕上げられたなめし皮は，販売するためにしばしばロンドンに送り返された。皮なめし工及びなめし皮仕上工はまた大量の水を必要としたため，〔彼らは〕河畔の敷地を求めた。市場への近接は第一に考慮すべき条件ではなかったため，大部分の皮なめし工及びなめし皮仕上工は，地代が安くまた飲料水の供給を汚染する可能性がヨリ少ない都市郊外に居住した。

原材料の供給は，他の諸工業の立地にも影響を与えた。たとえば，ミッドランズ西部，ヨークシャ南部及びディーンの森に金属工業が集中して営まれたことは，

ある程度まで，これらの地域に棒鉄及び燃料用薪材〔の供給〕が存在したことに基づいていた。市場向毛織物業は，羊毛，縮絨用の土 fuller's earth，及び水〔流〕が豊富に供給される地域に所在する場合がヨリ多かった。しかしながら，原材料入手の容易さということをもってしては，毛織物業の立地を完全に説明し尽すことは不可能である。主要な毛織物業地域はすべて，地域内の羊毛〔の供給〕を，イングランドの他の地域乃至はアイルランド及びヨーロッパ大陸からの輸入による供給によって補足していた。他方，羊毛生産を大規模に行っていたノーサンプトンシャやレスターシャといったミッドランド諸州は，自らは毛織物生産の重要な中心地ではなかった。また，16世紀における主要な毛織物生産地域が，市場向毛織物生産のそもそもの中心地であったわけでもなかった。中世イングランドにおいては，市場向毛織物生産は都市工業であった。特化した農村毛織物業地域の発達は，遅れて開始したのである。イングランド西部においては，毛織物業は14，15世紀に農村に拡がっていった。イースト・アングリア，ヨークシャのウェスト・ライディング〔といった大織物業地域，並びに〕ウェールズの北部と中部，ウィールド地域及びウェストモーランドといったヨリ小さな〔織物業〕地域においては，農村毛織物業の発展は15世紀及び16世紀前期に生じた。農村の毛織物生産への特化は，ひとつには13世紀以降における縮絨用水車の発達・技術革新に伴って進展した。またひとつには，制限を加えようとする都市ギルドの態度が，ヨリ企業心に富んだ生産者を刺激して都市から離れた所に毛織物業を創設させた。しかし，農村の特定地域に毛織物業が発達した最も重要な理由は，〔毛織物業者が〕安価な労働〔力〕を求めたことであった。

労働は，前工業化イングランドの大部分の工業における主要な生産要素であり，競争的な全国市場乃至国際市場で売却する生産者たちは，労働費用をどれほど要するかということを強く意識していた。農村地域には，その農業収入を補うためになんらかの副業に従事しようとする不完全雇傭の〔状態にある〕農業労働者がしばしば存在したため，安価な労働〔力〕を求める雇傭主にとって農村は魅力的〔な存在〕であった。紡糸，織布及びその他の織物業の諸工程は，農村の人々の間に普及していた伝統的な技術であった。糸車及び織機は家族の設備として一般的にみられるものであり，乃至は安価に購入することができ，困難なく農家に備えつけられた。織物業者にとっては，都市で生産するよりも農村で生産することの方が確かに高い流通費用を要したのであるが，それは農村労働費用が低額であることによって相殺されたのである。

殆どすべての農家及び小屋において，家庭内の必要を満たすためになんらかの製造業が行われていたのであるが，市場向けの工業生産がすべての農村地域の重要な特徴をなすものであるというわけではなかった，ということが，〔研究史上〕既に指摘されてきている。しかし条件に恵まれた所では，全国市場及び国際市場向けの工業生産が発達した。イングランドの西部においては，コッツウォルド及びメンディプ山地 Mendip から四方に伸びた諸渓谷に重要な毛織物業が確立されるに至り，輸出用の高級毛織物を生産した。そしてサマセットシャ西部及びデヴォンシャ東部には，専ら安価なカージー織を生産する第二の毛織物業地域が存在した。イースト・アングリアにもふたつの中心地が存在した。ひとつは専ら梳毛織物を生産し，ノリッヂ及びその周辺諸村にその基盤をおいていた。もうひとつは良質の白地広幅織及び安価な染色毛織物を多種多様に生産し，サフォークの南中部に存在したが，ストア河を越えて〔対岸の〕エセックス北部の諸教区をも包摂するに至っていた。ヨークシャのウェスト・ライディングにおいては，毛織物業はエア河の直ぐ北に端を発して，東部はリーズ及びウェイクフィールドまで，南部はハダースフィールドまで，西部はランカシャの州境まで広がった地域に限定されていた。この地域の主要生産物は，粗製紡毛織物であったが，17世紀後期には梳毛織物が重要なものとなった。全国市場及び外国市場に向けて供給するヨリ重要性の少ない毛織物業地域としては，バークシャ，ウィールド地域のケント，ウェールズ中部及び北部とウェストモーランドなどが存在した。殆ど例外なしに，毛織物業は農業のみから十分な収入を得るには農場があまりに小さすぎる人口稠密な教区に所在していた。低地イングランドにおいては，このような教区が所在したのは，隣接する穀作地域の教区よりも人口稠密な，小酪農場から成る森林—牧畜地域においてであった。たとえば，ウィルトシャにおいては，毛織物業は北西部の牧畜農業地域に集中して営まれ，白亜質土壌の牧羊—穀作地域には見られなかった。イースト・アングリアにおいては，サフォーク南部～中部が人口稠密な酪農地域であった。他方，ノーフォクの梳毛織物業は穀作が支配的な地域で行われたのであるが，イングランド第二の都市であるノリッヂに安価な労働〔力〕の供給が存在したという

ことが，恐らくその主要な理由であった。ウィールド地域のケントは，サフォーク高地地帯やウィルトシャ地域同様，人口稠密な牧畜農業地域であった。ウェスト・ライディング及びウェストモーランドにおいては，毛織物業は，農業によって人口の大部分を扶養するには土壌があまりにも痩薄な大教区に集中して行われた。たとえば，ハリファックス，

「……及びそれに隣接する他の地域においては，〔人々は〕土地の肥沃度が如何ほどの穀物もまた良質の牧草も齎しそうにない広大な荒地 wastes and Moors に定住したのであるが，しかし〔見方を変えるならば〕，素晴らしい場所に，しかも住民達の際立った勤勉によって定住したのである。そしてこれら住民達は，全く毛織物業によって生活している……(9)」。

イングランド農村における人口密度の相違の背後には，歴史家がこれまで殆ど考察しようとしなかった複雑な理由が存在する。低地イングランドにおいて最も人口稠密な教区は，曾ては，そして時には今もなお，鬱蒼たる森林の横たわる地域であった。これらの教区は開墾を待つ多くの未利用地を含み，この未利用地が土地を獲得することがヨリ困難な地域からの移住民を惹きつけたのである。16世紀に至っても，これらの教区はなお人口流入の中心地であったが，それは定住すべき土地がなお存在したという理由によるのではなく——逆に，これらの教区は今や人口過密となっていた——定住が遅れて行われた地域であったためにマナ組織が弱体であるか乃至は全く存在せず，また定住すべき小地片を見出す希望を抱いて新参者が到来するのを阻止することを意図した共同体規制が，たとえ存在したとしてもほとんど無きに等しい状態であったという理由によるのである。これらの地域は農村工業にとって安価な労働〔力〕の貯蔵所であったのであり，この農村工業はひとたび確立されるや，他の地域から無職の人々を惹きつけたのである。農村工業はまた，土地入手の可能性(アヴェイラビリティ)とは無関係に早婚のための経済的基盤を提供することによって，自然増加による人口の増加を促進した。北部の高地に所在する教区においても人口移入に対する制約が殆ど存在せず，その結果，人口の増加は農業によって人々を扶養すべき限られた面積の耕地の生産力(キャパシティ)を凌駕するに至った。かくして，これらの地域においては，過剰人口がただ工業生産に従事することによってのみ生活しうる安価な労働〔力〕の貯蔵所を創出したのである。

工業立地に対して人口密度が及ぼす影響についての以上のような議論は，毛織物業の事例に限定して〔論じて〕きたのであるが，これは他の諸工業についても妥当する。多数の金属加工業者を擁するミッドランズ西部の農村工業を営む諸村落は，隣接する穀作農業地域よりもヨリ人口稠密な森林地域に所在していた。〔これらの村落が〕織物業よりも寧ろ金属加工業に著しく特化したことは，付近に産鉄及び燃料用薪材〔の供給〕が存在したということによって説明される。イングランド西部の牧畜農業地域における手袋及びその他の軽皮革製品の製造への特化は，「その多くは他の如何なる職業(エンプロイ)にも従事しえないような多数の貧民(10)」が存在する諸村落において生じたものであった。ペナイン山地に所在する土地の不毛な諸教区においては，靴下編み工業が多くの貧民を扶養した。17世紀末において，ロンドンの下着及び履物類の製造業者は，人口移入に対するマナの規制が崩壊してしまった森林地域及び穀作農業地域の双方を含めて，ミッドランズ東部の人口過密な村々に見出される安価な労働〔力〕に惹きつけられた。要するに，遠隔地市場に向けて供給する農村工業は，市場が新たな機会を拓り開き，また生産者が利用しうる最も安価な労働〔力〕を探し出すに伴って，前工業化イングランドにおいて持続的に発展していったのである。

工業組織

前工業化イングランドには多種多様な工業が存在したが，〔工業〕組織がかなりの均一性を有していたため，調和あるものとなっていた。大部分の製造業者は，固定資本を殆ど用いることなく，労働集約的な生産方法を用いて小規模な営業を行っていた。工業技術の性格も市場の規模も，大規模な資本投下を必要とするようなものではなかった。機械は通常小型で，人力を動力としていた。専用の建物を必要とするような生産技術〔が用いられること〕は殆どなく，機械乃至労働者を収容し，或いは倉庫として用いるために土地・建物(プレイシーズ)が必要とされる場合には，通常低廉に賃借することが可能であった。たとえば，皮なめし業者は，多くの手工業者に較べてヨリ多くの〔作業〕空間と設備とを必要とし

注(9) 2 and 3 Philip and Mary, C. 13, preamble.
(10) House of Commons Journal, vol. XI. pp. 766-7.

たが，16世紀末において大桶，倉庫及び居住施設を完備した皮なめし場が年に2～3ポンド〔の賃借料で〕賃借できたのである。工業が問屋制下に組織された場合には，固定資本費用は更に一層減じられた。というのは，〔問屋制度の下では，〕通常自己の生産用具を所有する被傭者の家庭において生産活動が行われたからである。

平均以上の固定資本設備を必要とする職種も2，3存在した。たとえば，炭坑ではさまざまな設備のために資本が投下された。ハンティングトン・ボウモント Huntington Beaumont は，17世紀初期にイングランド北東部の炭鉱を開発するために6,000～7,000ポンドを費した。このなかには運転資本も幾分か含まれたが，大部分はボーリング及び排水施設に投資されたのであり，深い炭層の採鉱においては，これらのために常に多くの費用が必要とされたのである。しかし，深く掘り下げられたすべての炭坑には1ダースほどの浅い立坑が存在し，これらは鉱山リース，炭坑の支柱用木材及び2，3の簡単な採炭用具の購入以外には殆ど出費を要することなく採掘された。鉄工業においては，必要な設備及び附属建築物（アクト・ビルディング）を備えた高炉及び鍛鉄炉を設立するために，16世紀後期には恐らく100乃至200ポンド，17世紀中葉までには400乃至500ポンド，或いはそれ以上の費用を要した。これらの〔創設費用の〕総額は大きなものではあったが，原材料及び燃料の購入にあてられた資本と比較するならば少額であった。金属加工業においては，固定〔資本〕設備のための費用は通常極めて少額であった。アンブローズ・クロウリー Ambrose Crowley は，1728年に1万2千ポンドに相当する建物と設備を有し，極めて例外的な事例をなしていた。しかしその場合でさえも，固定資本は彼の総資産の12%を占めるに過ぎなかったのである。

16，17世紀を通じて新技術が導入され，また市場の拡大が大規模生産を価値あるものとするに伴い，工業に投下された固定資本の額は恐らく増大した。18世紀前期になると，クロウリーの如き大工業家（インダストリアル・ジャイアンツ），ホィットブレッド Whitbread の如き醸造業者によって凌駕されたのであり，このホィットブレッドは100万にのぼるロンドン市民の4分の3の人々の喉を潤すべく，1740年代には2万ポンドに相当する固定〔資本〕設備を用いていた。しかし，〔ともすると〕前工業化イングランドにおける大規模な企業の比重を過大視し，大部分の工業形態が小規模な労働集約的な手工業であったという事実を看過しがちである〔から，われわれは留意せねばならない〕。

産業革命以前においては，流動資本は建物や機械への投資よりも重要であり，産業革命後も長期にわたって引き続き重要な位置を占めた。〔たとえば，〕16，17世紀の皮なめし業者の財産目録の一分析例が示すところによれば，彼らの資本のうち設備に投下されている部分は3%に満たず，残りの97%以上は皮なめし工程にある獣皮，タン皮及び販売を待つばかりの仕上げられたなめし皮などの在庫から構成されていた。毛織物業者が直面する主たる支出は，羊毛の購入〔費用〕であった。たとえば，ウィルトシャのある毛織物業者は，1690年代に羊毛の購入のために1,400ポンドを支出している。金属加工業においては，棒鉄の在庫〔の確保〕のための支出が最多額を占めた。比較的資本集約的な諸工業においてさえ，原材料の経費が固定資本費用を上回っていた。たとえば，製鉄業における総生産費の70%は，高炉で使用される木炭の購入にあてられたのである。

前工業化イングランドにおいては，多くの理由のために，固定資本と比較して運転資本が重要な位置を占めていた。大部分の工業においては，殆ど理解されていない化学反応の緩慢な作用に――皮なめし業における如く――依存するか，或いは扱いにくく且つ自然力による断絶を蒙りがちな風力や水力によって恐らく補われつつも，人間の筋力によって骨を折りつつ行われるペースに依存するか，〔そのいずれかの状態にあったのであり，従って〕生産過程は長期間に及んでいた。問屋制度は，他に如何なる長所があろうとも，原材料の集配に時間を要するため製造期間を長期化した。交通が未発達であり，また市場機構が欠陥を有したため，製造業者は原材料及び完成品の在庫を保持することを余儀なくされた。たとえば，樫の木の樹皮を剝ぐことはただ春にのみ可能であったため，皮なめし業者は余分な費用をかけてタン皮の在庫を保持せざるを得なかったのである。毛織物業者，醸造業者及びその原材料が年々生産される他の手工業者も，同様の問題に直面した。そして，ひとたび商品が市場に向けて販売されるばかりになったとしても，それらを直ちに売却することは必ずしも可能ではなかった。市の立つ日が再び廻ってくるまでの1週間程度の短期間の売却遅延ですむ場合もあり得たが，外国市場向けに生産が行われており，船積輸送のための船便乃至は海外における有利な交易条件を待たねばならない場合には，売却遅延は数ヵ月に及ぶこともあり得た。イングランド内部においても，悪天候，疫病の発生，乃至は地方市場の場合には顧客の不足乃至通貨（コイン）の欠如によってさえも，取引

は容易に阻害され得たのである。

多くの製造業者にとって，労働〔費用〕は単一のものとしては最大の生産費〔目〕であった。紡績業及び織布業においては，労働〔費用〕は最終的な〔総〕生産費の約半分を占めた。金属加工業及び皮革加工業においては，この比率は恐らく更に高かった。多くの固定資本及び流動資本を用いる諸工業においては，労働費用は比較的少額であった。〔たとえば，〕サセックスのある製鉄業者は，1746年に彼の労働〔費用〕を製錬及び鋳造費用の18%以下と計算している。〔しかし〕実際には，製鉄業においては労働〔費用〕は恐らくこの数字が示す以上に重要であった。というのは，製錬費用の非常に大きな部分を占める木炭の生産は，それ自体労働集約的な作業だったからである。

市場が限定され，生産単位を小規模にとどめていたため，都市の手工業者はしばしば僅かに1名の職人と1乃至2名の徒弟を雇傭したに過ぎなかった。家族構成員以外には，労働〔者〕が全く雇傭されないこともしばしばであった。〔勿論，〕大規模な雇傭も存在した。〔たとえば，〕製紙工場は17世紀に〔上限〕12名程度までの労働者を雇傭した。鉄工場，真鍮及び〔真鍮〕器具工場，製糖及び明礬工場は，しばしば何十名もの労働者を雇傭したが，一般的な雇傭労働者数はヨリ少数であった。17世紀末に，イングランドの多くの炭坑は僅かに4～5名の労働者によって営まれていたが，30～40の炭坑ではそれぞれ30～40名の労働者を雇傭していた。海軍工廠は，イングランドでも最も多数の労働者を雇傭するもののひとつであった。チャタムChathamの海軍工廠は，17世紀前期には約40名を，そして1660年代には800名を雇傭していた。しかし，ヨリ典型的な造船所は，1名の〔船〕大工と彼の徒弟(ペイント)によって営まれるものであった。最大の労働雇傭主は，被傭者に対してそれぞれの自宅において〔なすべき〕仕事を与えていた製造業者であった。ヨークシャのウェスト・ライディングの織元は，彼ら自身の家族構成員をも含めてしばしば〔上限〕15名までの労働者を雇傭し，1週間に1反の広巾織乃至は2反のカージー織を生産した。ウェスト・ライディングの大織元は，〔上限〕40名までの梳毛工，紡毛工，織布工及び剪毛工を仕事に従事せしめていた。営業の規模はイングランド西部及びイースト・アングリアにおいて一般的にヨリ大規模であり，そこでは大織元がしばしば数百名の人々を雇傭していた。あるウィルトシャの織元は，年に400反の織物を増産するために，17世紀前期に500名の臨時労働者を雇傭した。必ずしもすべての者が同時に仕事に従事していたわけではないのであるが，その一世紀後にエセックスの織元は約500人の労働者名を書き記している。この問屋制度の本質は，需要の状態に応じて労働者が雇傭されたり解雇されたりする所にあったのであるから，問屋制工業に雇傭されていた労働者数を正確に述べることは不可能である。

自宅職工 out-workers は，しばしば厳密には被傭者ではなく，その原材料〔の供給〕及び生産物の販売をヨリ大きな製造業者に依存し，彼らとの契約において営業を行う独立の生産者であった。しかしながら，実際には小生産者はしばしば〔原材料〕供給者に対して多くの負債を負っていたため，彼らは事実上被傭者となった。

問屋制度は，前工業化イングランドにおける広汎な工業諸部門の特質をなしており，特に毛織物業及び金属加工業諸部門において特徴的であった。イングランド北部及びミッドランズにおいては，広く展開した手編み工業及び編み枠使用の編物工業のみならず，手袋及びその他の軽皮革製品生産の大部分も問屋制的に組織されて営まれていた。18世紀前期には，履物類製造業においても問屋制度が広く行われるようになった。問屋制度の普及は，非常に多くの製造業諸部門において労働が重要な位置を占めたことを明瞭に示している。問屋制度は，雇傭主が農村地域において不完全雇傭の状態にある低廉な労働〔力〕の供給を引き出すことを可能にし，固定資本の必要性を減じた。被傭者は，通常自己の生産用具を所有していた。もっとも，2，3の職種においては機械が高価であり――たとえば，リボンの製造に用いられたオランダ織機及び編み枠の最高価格は，17世紀末に1台80ポンドであった――その場合には被傭者は雇傭主から機械を賃借した。製釘工の検認財産目録には，しばしば『鞴の賃借料』'bellows rent'についての記載がみられ，安価な設備さえもしばしば賃借されていたことを示している。問屋制度は分業を促進した。たとえば毛織物業においては，選毛，梳毛乃至は刷毛，紡毛，織布，剪毛及び縮絨といった諸工程は，別個の労働者によってなされる別個の職業であった。大市場に供給する生産者にとっては，小生産者にはまねのできないやり方で，幾人かの労働者を特定の専門商品の生産に当らせることも可能であった。かくして18世紀前期において，エセックスのバリングドンBallingdonのトーマス・ブリッグズThomas Briggsの如き他の織元たちが大衆市場にまん幕用布地及び縮

綿を供給しているなかにあって，『フランスで流行するような』'french fashions' 高級織物の製造・販売を集中的に営む幾人かの織元も存在したのである。製靴業においては，ロンドンの幾人かの製造業者は，ノーサンプトンシャの諸村落において労働〔力〕を雇傭し，男性用，女性用乃至は子供用の履物類を専ら生産したが，ロンドンの救貧院（ホスピタルズ）に向けて整形用の靴の生産に特化した事例もみられた。

〔しかしながら，〕問屋制度にはいくつかの限界が存在した。〔まず第一に，〕大型設備及び動力機械を必要とする諸工業においては，問屋制度を採用することは不可能であった。〔第二に，〕高度の熟練を要する手工業乃至は厳しい監督を必要とする手工業にも適さなかったし，また，生産過程がひとつの工程から次の工程へと間断なく行われることを必要とする手工業にも適していなかった。〔更に第三に，〕技術的な条件が外業部労働者 out-workers の使用に適している場合でさえも，〔原材料〕配分のために多くの費用を要し，また〔外業部〕労働者の詐欺や不正によって損失を生じたことが，深刻な弱点をなしていた。以上の3つの問題は，拡大する工業製品市場の需要を満たすべく17世紀後期及び18世紀を通じて問屋制度が広く採用されていくにつれて，ますます明らかとなった。製造業者は，自分達が逼迫した労働市場において競争し，賃銀相場を競り上げ，被傭者を求めて問屋制度の網をますます広範囲の地域に拡げつつあるのに気づいた。このような状況の下においては，機械を導入することによって生産函数を変化せしめるよう働きかける〔労働〕市場の圧力は極めて大きなものとなった。しかし，機械化のための技術的な諸問題が解決されるまでは，問屋制度はイングランドの工業の多くの部門において，生産を組織するための最も経済的な方法としての地位を保ったのである。

問屋制度の4つの側面は，十分に強調しておく価値のあるものである。まず第一に，問屋制度は，労働費用が総〔生産〕費用のなかの大きな部分を占め，技術工程が監督をうけない非熟練の労働によって遂行され得る諸工業において発展した組織形態であった。第二に，問屋制度は，工業製品に対する需要の増大とともに展開していった。局地的な小規模の需要に応ずる製造業者にとっては，家庭の仕事場以外に労働を雇傭する必要は殆どなかった。第三に，専ら農村に限ってみられた現象であるというわけではなかったが，多くの外業部労働者 out-workers は，農村部のなかでも農業の扶養能力を超えて人口が増加したような場所に居住していた。第四に，問屋制度は，その最も発展した形態においては，販売と製造とを機能的に分化させ，また雇傭主と被傭者との間の社会的な区別を明確化する方向に導いた。問屋制度が通常自治都市（コーポレート・タウンズ）の境界を越えて営まれ，その結果，農村部に工業を成立・普及せしめていたという事実と相まって，この〔販売と製造との〕機能分化は，何世紀もの間イングランドにおける工業の特質をなしていた同職（クラフト）ギルドの権威を著しく弱めた。

同職ギルドは中世に発展し，1500年までには，イングランドのすべての都市は少なくとも1つの，そして時には12乃至それ以上のギルド（パラ）を有していた。ギルドは，都市から賦与されるか乃至は国王から直接獲得されるかした法人組織化（インコーポレーション）の特許状からその権威を引き出した。大都市においては大部分の手工業がみずからのギルドを有していたが，ヨリ小規模の都市の場合には，類似の職種が共同の〔ギルド〕組織を有するという形をとることがしばしばであった。そして，手工業者の総数が極めて少ない場合には，全く異った〔種類の〕手工業が共同で単一のギルドを結成することもあった。ギルドの機能は，その特定の都市における彼らの単一の手工業乃至諸手工業にかかわりのあるすべての活動を規制することであり，そのなかには，技量の水準の監督，市民（フリーメン）のギルドへの加入許可の統制，徒弟奉公の条件の統制，及び原材料と製品の取引の規制が含まれていた。ギルドは極めて独占的であり，生産・取引（トレード）を自己の掌中に保持し，〔ギルドへの〕新規加入者を容易に認可しようとせず，ギルドが自己の禁制圏（ブリヤーブ）と看做す地域において営業を試みようとする非ギルド成員を忽ちのうちに抑圧してしまった。

ギルドの権勢は，ギルドと都市政府との極めて緊密な合致に由来するところが大きかった。ギルドは，市会（シティ・カウンスイルズ）の名士でもある富裕なギルド成員によって統轄される場合が普通であった。ギルドは，都市行政の有用な手段であった。地方の市場開設地における取引を規制する都市役人は，ギルド成員上層の者のなかから指名され，これらの都市役人に対しては，特定職種の活動を統制する多くの都市にみられた地域内の規制を実施するという任務が与えられた。中央政府は，経済立法を施行するために彼らをしばしば利用したのであるが，この中央政府によって付加的な権力がギルドに賦与された。最もよく知られた事例は，1563年のなめし皮法の場合であり，この法令は，なめし皮監督官（サーチャーズ）及

びなめし皮検査官(シーラーズ)が都市域内の皮革諸工業ギルドの成員の中から指名されるべきことを要求したのである。しかしながら，賃銀及び徒弟制を規制する徒弟法 the Statute of Arftificiers の施行は，地方の治安判事及び都市の役人の掌中に委ねられたのであって，直接ギルドの掌中に委ねられたわけではなかった。

同職ギルドの機能は，早くも1500年には侵食されつつあり，16，17世紀のギルドの歴史は持続的な衰退の歴史である。工業が都市の郊外及び農村地域に拡がるに伴い，ギルドの権威は弱められた。都市自体の内部においても，ギルドは経済発展によって侵食された。営業(トレード)が増加するに伴い，都市の手工業者はその原材料をますます遠隔の地から取り寄せ，イングランドの遠隔の地に顧客を見出した。かくしてギルドは，周辺近隣の地域を基盤として取引を規制することがますます困難となりつつあることに気づいた。一方，ギルド成員は，2つのグループに分裂する傾向にあった。1つは地方市場向けの製造業に専念する手工業者によって構成され，他の1つは取引(トレード)に特化して，製造業者の〔かかえる〕問題に対しては殆ど関心を示さないことがしばしばであった。取引を行う〔商人〕グループは，作業に従事する製造業者〔グループ〕よりも通常ヨリ富裕であったため，〔やがて〕ギルド組織を牛耳るにいたった。このような発展の極端な事例は，ロンドン皮革加工・販売業者組合 The London Company of Lethersellers の場合にみられた。この組合は，軽皮革を用いるさまざまな手工業，〔即ち〕「手袋製造職人 Micanicks Glouers，財布製造職人 Pursers，及び（革紐を製造する）皮革裁断職人 Longe Cutters」が合併し，「皮革加工・販売業者〔組合〕と呼ばれる団体を結成すべく」15世紀末に形成された。一世紀の間にこの組合は皮革商人によって完全に支配されるに至った。

> 皮革商人は，「やがて（なめし皮を使用する手工業者を）従属的な地位に追いやり，皮革加工諸職人及びその子孫に対し自由を認めなかった……〔かくして〕今日では，皮革加工・販売業者組合から自由ななめし皮仕上工は存在しない。」(11)

なめし皮加工業者はその製品をロンドン市内で売却したのではあるが，彼らは皮革加工・販売業者組合の管轄外にある郊外に居住していたため，この〔皮革商人による皮革加工業者の支配の〕全過程は皮革商人にとってヨリ一層容易なものとなった。

ギルドの衰退は，緩慢な過程を辿った。衰退は他の地域におけるよりもロンドンにおいて，恐らくヨリ速かであった。ロンドンにおいては，組合員が市内の如何なる職業に従事することをも許可する慣行によってこの衰退が促進されたのであり，この慣行の結果，組合名がその組合員の活動と殆ど関係を有さないということもしばしばだったのである。しかしながら，ロンドンの諸組合も地方の諸ギルドもその権威をおいそれと引き渡したわけではなく，市民革命以前においては政府の手厚い保護を受けていた。ジェームズ1世もチャールズ1世も共に，新しい〔ギルド及び組合の〕組織に対して特許状を賦与し，既存の組織の特許状を更新した。このような特許状の賦与・更新は，ひとつには，工業活動の統制を行ううえでギルドが有用なものであるという揺ぎない信念に基づいて行われたのであるが，またひとつには，特許状の受領者がその特権に対して代償を支払い，常に財政難〔の状態〕に陥っていたスチュアート朝が〔この種の〕貨幣獲得の機会を見逃すということは殆どなかったためであった。1610年にサフォークのベリー・セント・エドムンズ Bury St. Edmunds に設立された毛織物職人組合 The Company of Clothworkers の如き，これらの新しい法人組織(インコーポレーションズ)のいくつかは，都市のみならず農村〔毛織物〕職人に対する支配権をも要求した。しかし，自治都市の外部における工業の発展は，都市に基盤を有するギルドに対して解決不可能な問題を提起し，他方，未だ曾てギルドに組織されたことのない製紙業や精糖業の如き新たな工業の出現は，更にギルドの威信を弱めた。17世紀末までにはロンドン及び地方にはなお多くのギルドが残存していたが，イングランドの経済生活においてギルドはもはやあまり重要な存在ではなくなっていた。

工業の発展

1500年以降の二世紀半の間，市場の発展は製造業者に対して絶えず新たな機会をもたらし，また新たな問題をつきつけた。人口の増加は，衣料，家屋，家財道具，飲食物の如き基本的な消費財に対する需要を増加せしめた。16世紀及び17世紀前期の長期にわたるインフレは，一部の人々の所得を増加させ，その結果工業製品に対するヨリ大きな需要が創出された。そして17世紀後期及び18世紀前期には，食物価格の下落に伴ってあらゆる階層の人々の工業製品に対する需要が拡大・深化した。外国市場もそれぞれ〔市場〕機会を提供した。

注(11) B. M. Additional Ms. 12504, p. 112.

イングランドの〔毛〕織物にとって，西ヨーロッパは極めて激しい競争下にありながらも重要な市場であった。そして，17世紀には新世界〔アメリカ大陸〕に植民地が建設され，〔かくして〕多くの工業部門の生産者に対して付加的な市場がもたらされた。

需要の増加に対して製造業者によって最初にとられた対応〔策〕は，既存の技術と組織形態を利用して生産を増加させることであった。それが技術的に可能であった部門においては，付加的な労働を雇傭するための手段として，問屋制度が〔ヨリ広範なものへと〕拡張された。そして問屋制度が適さない場合でさえも，ヨリ多数の労働者を雇傭するか，乃至は既存の労働力の労働を強化せしめるかすることによって，生産の増加は極めて容易に行われた。17世紀中葉以前においては，人口の増加が労働の供給を増大させたため，労働に対する需要の増大が賃銀の上昇を惹き起こすことは殆どなかった。しかしながら，人口の増加が緩慢であった17世紀後半には，賃銀が上昇した。そして，経済学的諸著作が低賃銀の経済的利益を強調するのもまさにこの時期においてである。賃銀は18世紀前期においても上昇し続けたため，製造業者は生産費を切りつめるための別の方法について考えを巡らし始めた。

生産量を増大させ，また単位当りの生産費を減ずるための手段としての技術的な発展は，前工業化イングランドにおいては一般的ではなかった。僅かの例外はみられたものの，毛織物業における基本的な技術は従来のままであった。1660年代にはいわゆるオランダ織機がリボン工業に導入され，18世紀の40年代にはジョン・ケイ John Kay とルイス・ポール Lewis Paul が織布及び紡績の新しい技法を開発したが，これらは産業革命の技術的発展を予示するものであった。しかしこれら〔の技術革新〕は，ここで議論の対象として〔取り挙げて〕いる時期〔1500～1750年〕における工業発展とは，殆ど関連を有していなかった。18世紀末以前の皮革工業においては，1，2の非実用的な珍奇な考案を除外すると，技術発展が全く欠如していた。衣料製造業においては，早くも1589年にはひとつの重要な技術発展がみられた。すなわち，この年にノッティンガムシャのキャルバートン Calverton の尊敬すべきレヴ・ウィリアム・リー the Rev. William Lee が，編み機を発明した。しかし17世紀後期以前においては，この編み機は殆ど使用されなかった。金属加工業においては，17世紀前期に截断機が導入されたことによって生産が促進された。〔この截断機は，〕鉄を都合の良い大きさの棒鉄及び棹鉄に截断し，企業家が問屋制経営を営むに適した形態の金属加工業用原料鉄を獲得することを可能にした。食料品加工業においては，大衆消費市場に向けて大量に醸造され得た濃密（ステイプル）な黒ビールが，1720年代にロンドンの醸造業者によって開発されたが，なお半世紀間は地方において重要な地位を占めるには至らなかった。

ただ単に労働を雇傭することによっては産出量を増大することが不可能であった鉱山業及び冶金業の如き，前工業化イングランドのヨリ生産量の少ないいくつかの工業においては，技術発展はヨリ大きな意義を有していた。〔たとえば，〕イギリスの石炭産出量は，16，17世紀の間に，16世紀中葉の年間20万トン強から一世紀半後の300万トン弱へと増加したのであるが，この生産の増加は，ただ単に採掘する小炭坑の数を増加させることによってのみならず，深い立坑を掘り，また新たな炭層を探査することによっても達成されたのであり，また，そのために新たな技術的問題が生じたのである。深い炭層を試掘するための採掘機は，17世紀前期にドイツから導入された。深い炭層の掘削のためには，改善された運搬，通気及び排水の方法が必要とされた。これら〔の技術上の諸問題〕は，どれひとつとして非常に首尾よく行われたためしはないのであるが，〔ともかくも〕さまざまな創意工夫によって改善が試みられた。そのような装置の例としては，たとえば人間〔労働者〕や石炭を上げ下げし，或いは地表に水を汲み上げる一連のバケツを〔昇降〕循環させた，馬力乃至人力による巻揚機が挙げられる。鉱山は，揚水機の〔開発・使用の〕草分けであった。ニューコメン Newcomen の気圧エンジンによってその2，3年後には凌駕されたのであるが，1698年にはトーマス・セイヴリィ Thomas Savery が彼の〔発明した〕幾分危険な『鉱夫の助け手』'miner's friends'〔と呼ばれる揚水機〕の特許を得ている。16，17世紀に鉱山業に導入された多くの技術は，ドイツからもたらされたものであった。そして，16世紀後期にノッティンガムシャで広汎に鉱山業を営んでいたフランシス・ウィラビィ卿 Sir Francis Willoughby が，ドイツの標準的な鉱業〔技術〕書デ・レ・メタリカ De Re Metallica の英訳版を所有していたということは重要である。増産された石炭の大部分はロンドンや他の諸都市の貧民に供給されたが，一部は工業にも使用された。工業用燃料として薪材の代わりに石炭を使用することは，生産技術を変えることなくしては，通常不可能であった。1709年乃至その前後

にエイブラハム・ダービー Abraham Darby が彼の高炉にコークスを利用するまでは，製鉄業において石炭燃料が効果的に使用されることはなかった。しかし，レンガ製造業やガラス製造業の如き2，3の工業は，〔製鉄業よりも〕遙か以前に〔薪材—木炭燃料から〕石炭燃料への転換を行った。コークスの生産それ自体は17世紀中葉に発達を遂げ，麦芽の乾燥に利用されていた。

冶金業における最も重要な技術革新は，1496年に鉄製錬業に高炉を導入することによって行われた。高炉の使用はウィールドの森 the Weald に着実に拡まってゆき，鉄鉱石から直接に少量の錬鉄を生産していたブルーマリーに取って代わった。技術革新の速度は，市場〔までの距離〕及び原材料の入手可能性によって決定された。高炉はブルーマリーの数倍の生産能力を有し，〔かくして〕確固たる産鉄市場が必要とされたのであるが，この市場はロンドンの発展及びイングランド南部海岸の防禦用と海軍用の兵器需要によって与えられた。製鉄業者は，自らが生産した銑鉄の捌け口を提供するために，高炉のみならず鍛鉄炉をも兼営することがしばしばであった。高炉の生産能力が増大したことによって，鉄鉱石及び木炭に対する需要も増大した。そして，鉄鉱石の採掘及び木炭の生産から鍛鉄所における製品〔棒鉄〕の生産に至るまでのすべての作業工程を生産者が管理する縦断的な統合〔一貫経営〕への傾向が，この製鉄業に生じてきた。

高炉〔の事例〕は，前工業化イングランドにおける技術発展に必要とされた，いくつかの条件を提示している。〔高炉に関して〕必要とされた技術的知識の獲得を別としても——高炉は〔本来〕大陸の技術であった——高炉の導入のためにはなお，連続的な〔一連の〕生産工程を含み，かなりの技術的及び管理的な熟練を要する複雑な工業組織形態が必要であった。〔高炉の導入が〕経済的に有意味であるためには，増産された産鉄を受け入れるに十分なだけの大きさをもつ市場が存在しなければならなかった。高炉とその付属施設を設立し，鍛鉄炉を付設し，原材料を購入乃至は〔自ら〕生産し，完成品を販売するうえで必要とされる資金をまかなうためには，資本が必要であった。従って，新しい生産方法は容易なことでは採用されなかったのであり，市場の拡大に直面した工業生産者たちが，それが可能である場合には既存の〔生産〕方法によって産出量を増加させることで一般に満足したとしても，何ら驚くには当らないのである。

真鍮及び銅の生産においても，技術的な発展がみられた。銅の生産は，1568年に法人組織化(インコーポレイテッド)された王室独占体であるマインズ・ロイヤル会社 The Company of Mines Royal のために働いていたドイツ人の技術者達によって導入された，事実上新たに創始された工業であった。このマインズ・ロイヤル会社は，真鍮の板及び線材を製造するために3年早く設立されたミネラル・アンド・バタリー会社 The Mineral and Battery Company と共に，政府がイングランドに輸入節約的な工業を設立しようとして行ったひとつの慎重な試みであった。ますます輸入が増加して，イングランドの生産者に対し潜在的に利益ある市場が存在することを示したため，イングランドには他にも新工業が政府の援助なくして成長した。たとえば，1495年にはハートフォードシャにおいて明らかにひとつの製紙工場が稼動していたのであるが，その経営は〔結局〕失敗し，その後ほぼ一世紀間〔16世紀〕にわたって，イングランドにおいては製紙業が成功裡に確立されることはなかったのである。16世紀末までには，明礬及び火薬の生産を行う工業が確立され，最初の製糖工場が建設され，また最初の緑礬工場が設置されていた。

経済的にみると，これらの諸工業はそれほど重要なものではなかった。既存の諸工業，特に毛織物業における新製品〔生産〕の発展の方が，ヨリ大きな重要性を有していた。毛織物の輸出市場は激しい競争下におかれており，〔しかも〕生産費節減的な技術革新によって競争に対応しうる見通しは殆どなかった。従って，毛織物業者はその製品の質を変えることによって市場の変化に対応した。『新種毛織物』'new draperies'の市場向生産の増加は，16世紀後期のイングランド毛織物業における最も重要な発展であった。伝統的に輸出向けに生産されていた大部分の毛織物は中級品乃至高級品であり，短繊維の羊毛を用いて製織され，製織後に縮絨されたものであった。これに対して新種毛織物は，梳毛織物の製造に伝統的に使用されていた〔ものと同じ〕種類の，梳かれた長繊維の羊毛を用いて製織され，織物は縮絨されなかった。多種多様な新種毛織物が生産されたのではあるが，品質及び耐久性に劣り，織り上がりが軽く且つ生産費がヨリ低廉であるという点においては，新種毛織物すべてが旧毛織物と相異っていた。かくして，これらの新種毛織物は，ヨリ高価な衣料を購入するだけの余裕のないヨリ貧しい消費者に歓迎されたのであり，また一方では，その仕上げが多様で且つ耐久性に劣るというこの新種毛織物の特質が，暫く

の間着用すると多大な出費をすることなく買い換えることのできる織物に対する流行市場を獲得することとなったのである。この新種毛織物はまた，ヨリ厚手の紡毛織物と比較すると，ヨリ温暖な南ヨーロッパの市場に適するものであった。

供給面においては，囲い込み放牧地に導入された太った羊から刈り取られる長繊維の梳毛用原毛の供給の増大によって，新種毛織物〔生産〕の発展が促進された。しかしながら，農村地域において安価な粗製の毛織物の製造が長期間伝統的に行われ，家庭及び近隣の需要を満たしていたという事情こそ，〔新種毛織物業発展を促進した，供給面における〕恐らくヨリ一層重要な原因であった。これらの伝統的な毛織物業は，イースト・アングリアの梳毛織物業及びデヴォンシャのカージー織物生産（粗製の『旧毛織物』'old draperies'）と共に，既に16世紀には外国貿易に〔その一環として〕組み込まれていた。新種毛織物〔業〕は，「農民の〔製織〕技術の商業化」[12]が一層進行した段階にある織物業であった。16世紀の前期を通じて，フランダースの毛織物業は，イタリアの毛織物業の衰退によって開放された南ヨーロッパの市場を開拓するために新種毛織物の生産を開始した。スペイン領ネーデルランドに生じた宗教的動乱のために，フランダースの多くの織布工がイングランドその他の地方に逃亡することを余儀なくされた時点において，この新しい毛織物〔の生産〕は既に他の〔毛織物業〕中心地へと拡がりつつあった。ノリッヂの都市当局に勧められて〔フランダースからの〕多数の亡命者が市内に定住し——1571年までに定住者数は4,000名近くに達した——梳毛織物と類似の生産方法を用いた『外国風の〔毛織物〕商品』'outlandish commodities'〔の生産を普及せしめること〕によって，衰退しつつあった梳毛織物業の復興を助けた。エセックスのコルチェスター Colchester やコッグスホール Coggeshall にも他の〔一群の〕亡命者が定住し，新種毛織物生産の展開を促した。デボンシャにおいては，外国人〔織布工〕の〔亡命による〕直接の影響は無視し得るほど微々たるものであったが，確立していたカージー織物業から新種毛織物〔の生産〕がごく自生的に発展した。

これとは異なる生産物の分化が，イングランド西部において生じた。安価な毛織物の市場を開拓しようとする代わりに，イングランド西部の〔毛織物〕生産者は，高級染色毛織物に対する需要の獲得を目的として，17世紀前期に染色『スペイン織』'Spanish cloths'の生産を開始した。『スペイン織』と通称されるのは，それが本来輸入されたスペイン産の羊毛によって製織されたためであった。南ヨーロッパからイングランド南西部の諸港にスペイン産の良質の羊毛を容易に輸入し得たことは，この〔スペイン織生産の〕発展に疑いもなく貢献した。しかし，スペイン織の生産を創始した——乃至は創始したと自ら主張した——ベネディクト・ウェッブ Benedict Webb の如き織元の事業もまた〔スペイン織生産の発展に対して〕少しく〔貢献したものと〕評価されねばならない。彼はまた，織物の仕上げに不可欠の油〔の生産〕に必要とされる，西洋アブラナの種子の栽培の試みに，多額の資金を費やした。ウェッブ及び彼の仲間の織元たちが成功を収めたことは，ロンドンからドイツ及びオランダ共和国に向けて輸出されたすべての旧毛織物のうちスペイン織の占める比率が，1628年には4%以下であったのに対して1640年には22%であったという事実に示されている。

新種毛織物及びスペイン織は，17世紀に毛織物業に生じた，ヨリ一般的な〔消費市場の変化に対する〕適応過程の特殊事例をなすものであった。1600年における主要な輸出毛織物業地域は，イングランド西部及びイースト・アングリア，特にサフォークとエセックスの境界沿いの南部地域であった。ウェスト・ライディングの粗製毛織物業地域は遙かに遅れた段階にあり，イングランド南部に散在したいくつかの毛織物業地域と比較してさえも，その輸出量はヨリ少量であった。17世紀末までには，イングランド西部はスペイン織及びその他の染色織物〔生産〕への転換に成功していた。隣接州のデヴォンシャは，旧来のカージー織物業〔の基盤〕に新種毛織物〔業〕を移植すると同時に，アイルランドから輸入される長繊維の羊毛と南ヨーロッパから輸入される短繊維の羊毛とを用いた混織たるサージ織物の生産を発展させることによって，〔織物業地域として〕急速に重要性を増していた。イングランド東部においては，ノリッヂの毛織物業が新種毛織物〔の生産〕を基盤としてますます発展していったが，サフォーク及びエセックスの毛織物生産者は，隣接するノフォークの毛織物生産者とイングランド西部の混織との競争に直面したため，それほど順調には発展しえなかった。

注(12) D. C. Coleman, 'An Innovation and Diffusion: The "New Draperies"', Econ. Hist. Rev. 2nd ser., vol. XXII, no. 3, 1961, p. 421.

ヨークシャのウェスト・ライディングは，17世紀後半までに梳毛織物をも含めた新種毛織物〔の生産〕に転じ，1700年までには最も繁栄せる毛織物業地域のひとつとなっていた。他方17世紀前期には，まだ小規模なものではあったが潜在的には重要な発展が，ランカシャ南部において生じた。〔即ち，〕リンネルと綿の混織たるファスチアン織物業である。最初はレヴァント産の棉花が〔原綿として〕用いられていたが，後には西インド諸島からリヴァプール港を介して供給されるようになった。カリブ海のプランテーション植民地及びアメリカのタバコ植民地が発展して，〔これらの〕安価な薄手の織物の〔ための〕市場を提供した。一方，インドからのキャラコの輸入に刺激されてイングランドにおける〔これらの織物に対する〕需要が増加したが，このキャラコの輸入はこれらの新種織物に対するイングランド人男性——及び女性——の欲求を刺激したのである。

毛織物業の全面にわたって，織物仕上業及び染色業が発展した。17世紀前期においては，イングランドの織物仕上げの〔技術〕水準は海外の高級品市場の需要に適したものではなく，毛織物の約4分の3は未染色且つ未仕上げのまま輸出されていた。〔しかし〕17世紀末までには，外国に売却〔輸出〕された毛織物は殆どすべて染色・仕上げが施されていた。染色業の発展は，17世紀の小さな謎のひとつとなっている。〔この発展は，〕生産面においては，当時のイングランド農業の特質をなしていた大青，あかね，サフラン，ウェルドその他の〔染色〕原材料の生産の増加と関連を有していた。需要面においては，新種毛織物及びスペイン織と同様に，〔この発展は〕消費市場における変化に対応した生産物の分化の一事例をなすものであった。

需要の変化に対して，諸工業が既存の生産手段の〔一層の〕開発（イクスプロイテーション）・利用，新技術の導入乃至は生産物の多様化のいずれ〔の方法〕によって対応したにせよ，資本と企業とが必要とされた。〔そして，〕このいずれとも，存在した。大部分の工業部門において，資本が個々の企業家とそのパートナー乃至は友人の資力を超えることは殆どなかったし，運転資本は通常〔資本〕提供者の繰り延べ信用（イクステンデイド・クレデイット）の〔授与〕という形で得ることができた。鉄鉱業（アイアン・マーキング）及び石炭業においては，企業及び資本は，鉱床と豊富な木材を含む所領を有する土地所有者によって共に供給された。企業家に独占権を賦与することによって，王室が関与することもしばしばであった。たとえば，ミネラル・アンド・バタリー会社及びマインズ・ロイヤル会社は王室の特許状を有していたが，この特許状によってイングランドの資本とドイツの技術（テクニカル・スキルズ）とが結合されたのであった。このいずれの場合にも，それは多額の開発資本を必要としながら確固たる市場を有さず，〔従って〕独占権を必要とした新工業であった。このほか，ガラス，石鹸，明礬及びその他の商品生産に対する独占がジェームズ1世によって確立されたが，これらの独占は既存の諸工業を妨げることによって，企業〔活動〕を刺激するよりも寧ろ抑圧してしまったのである。

前工業化イングランドにおける工業発展は，外国の影響にその多くを負っていた。ヨーロッパ〔諸国〕の技術を導入した工業の一覧表を作成してみると，印象的なものとなる。〔即ち，〕鉄製錬業，銅山業，真鍮板及び線材製造業，金属加工業，ガラス製造業，製紙業，明礬工業，精糖業，ブリキ製造業，新種毛織物業，絹織物業，その他多くの事例〔を挙げることができる〕。外国の技術に関する知識は，いくつかの方法によって獲得された。前工業化イングランドには，外国人の移民がふたつの波をなして定住した。1560年代に，スペインの迫害を逃れて渡来したフランダース，ワロン及びオランダの新教徒がさまざまな技術，特に新種毛織物の紡糸及び織布の技術をもたらした。1685年のナントの勅令 the Edict of Nantes の廃止に続いて，4～5万のフランスの新教徒（ユグノー）がイングランドに定住したが，彼らの多くは織物，紙，ガラス，金属及びその他の商品の製造に熟達していた。このほかにも，外国人は個々別々にイングランドに渡来するか，或いは招かれるかしたのである。イングランド人が新しい生産方法を求めて外国に旅行することもしばしばであった。たとえば，アンドリュー・ヤラントン Andrew Yarranton は，ミッドランズの製鉄業者のグループによってブリキの製造技術を発見すべく1665年にサクソニーに派遣された。ヨリ内密に〔行われたのではあるが，〕ノリッヂの絹織物工ジョン・ローム John Lombe は，イタリアの絹織機の詳細〔図〕を密かにイングランドに持ち込み，1718年にはイングランドにおける最初の絹織物工場をダービーに設立した。

外国人は異質の存在であるだけに〔それだけ一層〕人目を惹きやすく，〔従って〕無名のイングランド人の成し遂げた〕成果が，工業技術（テクノロジイ）の発展に対する彼らの貢献によって影の薄い存在にされてしまうということは，十分考えられることである。外国人の果した役割は，ヨーロッパのある地域には既に存在していたが，市場条件がそれを価値あるものとするまではイングラ

ドンにおいては利用されることのなかった技術の知識を広めたことであった。即ち，前工業化イングランドにおける技術発展は，全く新しい技術を開発するというよりも，寧ろ知られてはいたがそれ以前には利用されることのなかった技術を生産に適用するという形をとって行われたのである。〔そして〕この〔発展〕過程が，外国人によって大いに促進されたのである。

成　果

1500年から1750年までの間に，イングランドの最も重要な工業の生産量がどれくらい増加したのか，算定することは不可能である。〔しかし，〕ヨリ生産量の少ない工業については，ある程度の統計的史料が残されている。石炭の産出高は，16世紀中葉から17世紀末にかけて14倍に増加した。ガラスの生産高の増加は，石炭以上に目覚しいものであった。塩の産出高は，1540年から1640年までの間に3倍となった。棒鉄の生産は，1500年においては取るに足らないものであったが，一世紀後には年に1万トンを産するまでになった。17世紀の中葉には〔棒鉄〕生産〔の増勢〕は鈍化したが，その後極めて緩慢にではあるが再び増勢に転じ，1760年までには年に3万トンを産するまでになった。しかし，〔生産増加率算定の〕基準となった〔生産量の〕数値〔自体〕が極めて小さなものであるから，これらの諸工業における生産増加率をうんぬんしてみてもあまり意味がない。工業の総生産量について述べるならば，それは前工業化期を通じて疑いもなく上昇した。工業総生産量〔の増加〕が常に人口の増加に先行していたかどうかということは，また別の問題である。

工業の発展を示す統計的乃至は印象的な事実以上に重要なものは，工業部門においてますます多様化が進展しつつあることを示すいくつかの特徴である。というのは，経済発展は，ヨリ大きな生産高を意味するのみならず，消費者の選択の範囲の拡大をも意味しているからである。〔この点に関する〕最も明瞭な証拠は，イングランドの工業輸出品の構成〔表〕によって与えられる。16世紀前期においては，紡毛織物が唯一の重要輸出商品であり，〔しかも〕その大部分が半仕上げ品であった。その二世紀後〔の18世紀〕になると，輸出品の中にはあらゆる種類の完全に仕上げられた紡毛織物，新種毛織物，ファスチアン，リンネル，絹織物，鉄製品，銅及び真鍮，ブリキ，ガラス製品及び陶器，皮革製品，石炭及びその他多くの生産物が含まれていた。〔しかし〕紡毛織物を別とすれば，これらの諸工業のいずれにとっても外国市場は重要なものではなく，工業製品の大部分は，発展しつつある国内市場に向けて供給されたのである。

「……我々は，商工業 Trades and Curious Arts が増加するに伴い，農業 the Trade of Husbandry が減退するであろうことに注意を払わねばならない……」[16]と，1691年にウィリアム・ペティ卿 Sir William Petty は記した。この知覚の鋭い観察者にとっては，17世紀末以前においてさえも，非農業部門がますます重要性を増しつつあることは〔十分〕明瞭に認識されたのである。都市化もまた，彼の目を捉えた兆候のひとつであったに相違ない。たとえば，ロンドン及びその他の港湾〔都市〕の発展と，マンチェスターやバーミンガムの如き『単なる村落』〔に過ぎなかった場所〕の拡大・発展などがそれである。2，3の地域においては，工業が非常に重要なものとなったため，農業はその地域の経済において小さな役割を演ずるに過ぎなくなっていた。デフォー Defoe が18世紀前期にウェスト・ライディングを訪れた時，彼はこの地域が富み且つ多様な工業を営んでいることに感銘を受けている。ドンカスター Doncaster は，主要産業として編物業を営む『大工業都市』'a great manufacturing town' であった。シェフィールド Sheffield は，「非常に人口稠密で且つ〔町並は〕大きく，街路は狭く，鍛冶炉から引きも切らずに吐き出される煙のために，家々は暗く黒く覆われていた」。「ブラック・バーンスリー Black Bansley は，鉄及び鋼の加工業において今なお卓越した存在であった」。ウェイクフィールド Wakefield 及びリーズ Leeds は，繁栄を極める活発な織物都市であり，リーズとハリファックス Harifax との間の農村部には毛織物業に専念する多数の大村落が存在して，勤勉に，「否，〔寧ろ〕忙しそうに，立ち働いていた」。ハリファックス自体はただの村落に過ぎなかったが，農村部のなかでは最も人口稠密であった場所である。ところが，〔通りで〕人影を見かけることは殆どなかった。「しかし，もしわれわれが誰か親方製造業者の家の戸を叩くならば，われわれは直ちに建物が強壮な人々で満たされているのを目にとめる。染色油〔の桶の所で作業している〕者もあり，毛織物を仕上げつつある者もあり，織機に向って織りつつある者もあり，ある者はこの仕事に，ある者はまた別の仕事に〔という具合に〕すべての

注(13)　Colin Clark, The Conditions of Economic Progress, 2nd ed. 1951, p. 395. に引用されている。

者が仕事に精を出している……」[14]。イングランドの他の地域には，海軍工廠，ロンドンの大醸造所，アンブローズ・クロウリーの金属加工工場及び大炭坑の如き大規模な工業施設が存在し，これらはすべて多数の労働者を雇傭していた。

ネフ教授 J. U. Nef によれば，以上のような発展は全体として，「18世紀の産業革命に劣らぬ重要性を有する」初期産業革命をなすものであった。彼のこの主張は，工業生産の確実な増大，新たな諸工業及び新技術の発展，及び多くの工業における企業規模の拡大〔といった諸事実〕に基づいて行われている。しかし，ネフ教授が，〔当時の〕経済においてはヨリ重要性の低かった諸工業に力点をおいて論ずる結果，過大な主張を行っていることは明白である。織物業，衣類製造業，皮革工業も，また工業部門の大部分を占めていた6つの消費財製造業のいずれをとってみても，その生産方法乃至はその経営規模において何らの重要な変化をも経験するということはなかった。ネフ教授の工業発展の叙述のなかで際立って前面に現われている諸工業においてさえも，固定資本総額が大きな額に達するということは例外的な現象であった。1人の企業家による多数の労働者の雇傭は，問屋制度のもとで外業部労働者 out-workers を広汎に採用するという形をとって行われた場合を別とすれば，1750年以前においては異例のことであった。最後に，われわれはみずからに次のように問うてみる必要がある。即ち，産業革命とはそもそも何を指すのであろうか，と。もし仮に，産業革命が単なる機械技術の変化乃至は生産量の増加を意味するに過ぎないとするならば，その場合には前工業化イングランドは一度ならず数回の産業革命を経験したことになる。しかし，経済史において通常見出される産業革命の概念は，それ以上のものを意味している。〔即ち，〕それは経済構造の変化，〔換言するならば，〕停滞によって特徴づけられる経済から，工業発展によって生ずる高く且つ持続的な経済成長率を有する経済への変化を意味するのである。1750年以前のイングランドにおいては，これらのいずれも生ずることはなかった。1750年においては，1500年におけるよりもヨリ大量の工業生産物が生産され，また生産される商品〔の種類〕もヨリ広範にわたっていた。人口のヨリ大きな部分が工業に従事していたことは殆ど確実であり，またもし仮に計測することが可能であるならば，18世紀前期における工業が，その二世紀以前と比較して国民所得のヨリ大きな部分を生み出していた，ということも恐らく判明するであろう。しかし，〔以上の事実にも拘らず，〕それは工業化による経済の変貌からは，なおほど遠いものである。1750年以前においては，経済は基本的に農業的な状態にとどまっていた。

大　貫　朝　義（経済学部助手）
酒　田　利　夫（大阪学院大学商学部専任講師）

注(14) D. Defoe, A Tour Through England and Wales, Everyman ed. 1928, vol. II, p. 180 et. seq.
(15) J. U. Nef, War and Human Progress, 1950, p. 13.